
モブキャラに恋しました。

八つ橋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モブキャラに恋しました。

【Nコード】

N3162X

【作者名】

八つ橋

【あらすじ】

いつの間にか転生させられていた主人公がモブキャラに恋をする。
ほのぼの系恋愛学園コメディー。

原作キャラもです

少し独自解釈があります。例えば聖祥学園が共学などですが複線に使っているものもあります

では、どうぞ

自己紹介しました。（前書き）

メイン差し置いて書きました。

面白いかわかりませんが楽しんで頂けたら嬉しいです。

メインは受験明けに更新したいなと思ってます

自己紹介しました。

こんにちは、俺は一応言っておきますけど転生者です

訳あって原作は介入してません

魔力はあります。S+といったとこだが、魔法の練習はしてない。
だって介入しないんだもん

デバイスもあるけど会話ようにしか使っていない。使うは変だな、
もう家族同然だ。名前は「ユーナ」女の声でインテリジェントデバイス。

形は指輪だけど、怪しまれないように学校に行くときはいつも家に置いて行っている。このデバイスのすごいところは無駄にハイスペックで人間の状態になれる。

人間の姿で戦う事が出来る魔力はA A+ぐらいだ。

ユーナはテンションが異様に高い高い、どこで知ったか知らないけど何故かあげぽよ朝だよって言って朝起こされた

正直可愛かった。いや寝ぼけていただけだ！ そのはず・・・

え、俺の名前誰か言ってないかって

「那緒」朝ごはんよ」

母さんが珍しく朝食を作ったようだ。いつも作るって言っているのに

「今行くよー」

俺の名前は君野きみの 那緒なお

私立聖祥学園中等部二年生

これからほのぼの、のんびり過ごします

自己紹介しました。（後書き）

どでしたかね・・・

よければ感想くださいまっています。

初恋しました。
(前書き)

第二話です

初恋しました。

春、桜散る季節

俺は一目惚れました

その人は俺と同じクラスの隣の席、流れる黒い髪、透き通る黒い瞳。

一瞬で虜になりました

名前は「中川^{なかがわ} 榎奈^{かな}」さんというらしいです

学校の自己紹介から二週間が経ち、クラスメイト達が幾つかのグループに分かれ始める時期

榎奈さんも一つのグループに分かれていました

俺は友達とかどーでもいいからいつも席からは動かないけど

唐突だけど、このクラスには原作キャラのなのは・アリサ・すずかがいました

いつも休み時間に右斜め前に三人がいて正直邪魔でしようがない

楽しそうに話してる榎奈さんが見えねえんだよおお！！！！

何故、原作キャラに恋しなかったかというと

「なあ、なのは今日翠屋に行っていていいか？」

「良いよ、みんなで行こうよ」

「良いわね、今日空いてるし」

「私も平気だよ」

というわけ、わかった？

そうもう一人転生者いたんですよ。名前は白神しらかみ 大河たいがって言うらしい
興味は無いからうる覚えだけど

本当はメインキャラと恋したかったんですけど、あいつが少し早く絡
んでいったから俺は付け入る先がなくなったわけよ

でももうどうでもいいやって思ってる

聖祥ってレベル高いよね。転生前なんかブスばっかでうんざりだ
ったし

だから原作キャラはどうでもいいやってわけじゃないけど、恋愛対
象じゃなくなりました

「大河くん今日もお兄ちゃんとお稽古？」

「うーん、多分そうかもね」

まだ話してるよ

いい加減そこどけよ、榎奈さんが見えないから別に榎奈さんの事ストーリーカーしてるわけじゃないよ

悪行してんのは白神大河の方だユーナ曰く

白神大河は学校の裏サイトの管理人らしい

詳しくは知らないけど犯罪まがいなこと平気でやってサイトに載せてるらしい

ユーナが何故かハッキングが出来た時はびつくりした。俺マスターなのに知らなかったし

面白そうだという理由でユーナが既にハッキングしてたらしく「見つけたよ」と言つて液晶画面に盗撮画像見せられた時は驚いて鼻血出たのは黒歴史のページ目

とりあえず、さっきの腹いせにユーナにウイルス流してもらつたこれでパソコンや保存画像は使えなくした。下手にいじつたら家電製品をパーにしてとユーナに言つていた

それから犯罪防止という名のやつあたりを幾度もした

初恋しました。(後書き)

はい、どうでしたか？

これから続きます

初めて会話しました。(前書き)

三話です。

感想、誤字、脱字等ありましたらお願いします

初めて会話しました。

いつものように朝早く起きて学校で寝てる那緒です

最近、同じクラスの女子に名前と顔を交互に見られ最終的には那緒ちゃんって言われました

それと男子には男の娘って噂が流れてるらしい

てめーらしばいたろうかつつ！！

いらいらして寝れない時

ーガラッ

一瞬俺は肩を震わせ近くでバックを下す音が聞こえた
まさかと思って隣を見てみると榎奈さんがいました！

それに気付き榎奈さんが笑顔を見せました

やばっ、めっちゃかわいいよ。今日はなんて幸せな日
しかも、二人つきりだ。恥ずかしさと嬉しさで心が踊る

「おはよう？ それともおやすみ？」

うおー声かけてくれた。まぢ神だ！

「おはようかな？」

こんな勿体ないチャンス逃してたまるか
にやけを抑えながら必死であいさつする。始めが肝心って誰かが言

つてた気がする

「君野くんはいつもこんな早い時間に来るの？」

幸せの時間継続中

「うん、親が仕事で忙しいからせめて朝ぐらいはゆっくりさせてあげたくて朝ごはんとはんとはんを作ってるからかな」

「へー、君野くんは親想いでお弁当も作ってるんだね」

榎奈さんがそう言っ天使のような笑顔を見せた

もう死んでもいいかな？

「そんなことないよ。俺んところは母子家庭だから出来ることがあるばやってるだけだよ。弁当を作るのもその一つかな」

「ごめんね……。君野くんの家庭の事情知らなくて」

天使の顔から一変、今にも泣きそうな顔に変わっていた

うわーやらかした俺

「へ、平気だよ別に。父さんは仕事で外国に行っちゃって今まで会った事が無いただだから、死んではないよ」

赤子を扱うように手をそわそわさせて、声が明らかに慌ててたりダサすぎる

でも、悲しそうにしてる榎奈さんも可愛い…ゲフンゲフン

「そうなんだ…。よかった〜私余計な勘違いしてたみたいだね」

「でも、すっごく嬉しかったよ。俺の事で心配してくれて」

さっきの空気はすぐに消えて俺は榎奈さんを見ながら、榎奈さんは俺を見ながら笑った

「「あははははっ」「」

本当に今日は良い日だ星座占いが微妙だったけど、転生して一番楽しかったかもしれない
そんな事を考えてたらあいつらが邪魔してきた

「おっはよ〜。あれ、二人しかいない」

「たく、当り前でしょ！ 大河が早く来すぎるのよ」

「そっだよ大河くんいつもより30分も早いよ」

「大河くん、アリサちゃん、すずかちゃん歩くの速いよ〜」

あいつら〜まぢ、うぜー空気読めよ！ なんだよいつもより30分

早いつて。榎奈さんがびっくりしてるじゃねか

「あれ？　もしかして邪魔だったかな？」

なんだよその顔、メツチャにやけてんじゃん。気持悪いんだよ
榎奈さんがその言葉に反応して顔赤くなってるよ

俺なんかと噂されたらいやに決まってる。そして、俺は白神大河を
睨みつける

「ごめんね、邪魔だったかな？　私たちはどっかで暇つぶししてる
ね」

おい、それは余計なお世話だよ。あーあ、榎奈さんがさっきよりも
耳まで赤くなってる。俺はなのはを白神大河よりも睨みつける
なのははびくつと肩を震わせ一歩後退する

小さく榎奈さんに

「こんな思いさせてごめん」

「えっ？」

ただ恥ずかしいだけかもしれないけど、俺としてのプライドが許さ
ない
バックを持って学校をサボった

教室を出る際に白神大河を睨みつけるのを忘れずに帰った

えっ？ その後どうしたって？

もちろん母さんとユーナに説教されましたよ。二時間くらい

初めて会話しました。(後書き)

三話でした。

魔王が奇襲しました。(前書き)

四話です。

連続投稿です

魔王が奇襲しました。

朝は見苦しいとこ見せてしまった那緒です

あの後なのはさんがね家まで押しかけてきたんだよ
来たときは奇襲！？　って思ってた勝てるわけ無いのに使ったこと
もないユーナを出すところだった

高町なのはめ！　いや、なねは侮れない

なねはが押しかけた理由は二つある

1つは今日の事を謝りに来た。別にそんなことでくんなよ、見たい
テレビが見れなかったことで怒ったわけではない。

二つ目は母さんに用があるらしい。知ってると思うけどなねはの母
さん、桃子さんと母さんの仲が良いらしい。小学校からの親友とか
それで翠屋のシュークリームを渡しに来た

あの超絶うまいシュークリームは翠屋だったのか！
今度行ってみようかなと思ったのは口に出さない

「あの夜遅くすみません水香^{みずか}さん、那緒くん」
水香^{みずか}ってのは母さんの名前ね
なんでさ、初めて話すのに名前で呼ぶ？

「あらあら、なのはちゃんわざわざごめんね。こんな遅い時間なの
に」

まあ、確かに中二で11時に男子の家訪ねてくるのはおかしいよな

「今日、その朝ごめんね那緒くん。彼女との会話邪魔して」

「バカ、違うよ俺と榎奈さんはそんな仲じゃないよ」

「あら、なーくんにもうそんな時期が来たのね」

ハア、出たよ母さんの悪い癖が…後で問い詰められるなこれ。てか、口軽くねなねはのやるー
わざとか？

「え、違うの？」

どうせ、榎奈さんとはそんな仲じゃないですよー

「なのはちゃん楽しんできるとこ悪いけどそろそろ帰った方がいいんじゃないの？」

「あつ、そうですね。では水香さんおやすみなさい。那緒くんまた明日ね」

「何言ってるの？ こんな遅い時間に女の子一人で帰させられないでしょ？」

なんかすつごく嫌な予感が

「なーくん連れて行きなさい。なーくんなんで部屋に帰ろうとするの？」

襟を掴まれて元いた場所に戻される。なんて力だ、あんな細い腕のどこにあるんだ？

「悪いですよ。水香さん家すぐそこじゃないですか」

「そんなこと気にしないのよなのはちゃん」

「俺行かないぞ」

「良いから行つて来てなーくん！」

いたつ、なねはの死角からみぞうちを突いてきやがった

「わ、わかった行つてくるってだからっ！」

その言葉で満足したのか行つてらっしゃいと言ってリビングに戻つて行つた

「ほら早く行くぞ高町」

「う、うん」

ああ、みぞいてゝなあ

魔王が奇襲しました。（後書き）

四話でした

感想でなのは達を避けるのはどうかという感想がありました。がまだ始まったばかりなので、そこはまだよくわかりませんね。分かり次第皆さん方話分かってくると思います。楽しみに待っててください

それと、主人公の那緒ですが思ってることと言ってることは転生者ですが思春期なので大体は名前で呼ばないで苗字で言います

夜、家まで送りました。（前書き）

五話です。

感謝感激！！ 連載三日目で総合評価106pt
お気に入り38件

PV合計11・128アクセス

ユニーク合計2・240人

本当にありがとうございます。

これからもまだまだ「モブキャラに恋しました。」は続きます！！

では、どうぞ！

夜、家まで送りました。

こんばんはユーナに笑われた那緒です。

笑われた後なねは、もうめんどくさいからなのはでいいや
なのはを家まで送っています

今日は満月でいつもより周りが明るい

満月は良いね。丸い物は意外と好きだ。それと光でなのはの顔がは
つきりわかる

こうしてまじまじ見てみると普通に可愛いと思う

昔は恋人が欲しいことしか考えてなかったけど、友人って選択あ
ったよね

小学校の時だったからそこまで考えてなかった。今考えるとませて
るなあ俺

原作キャラのことを少し見直してるとなのはがこっちを向いて話
しかけた

「あのさ、那緒くんは中川さんとは付き合っていないんだよね？」

思い返すと朝二人で話してたのって勘違いされやすいのかも。それ
で怒った俺ってダサすぎるわあ

軽く流せば良い事だったのに、原作キャラって意識してたとしたら
白神大河に対しての嫉妬かな？ それとも妬みかな？ どっちか知
らないけど、それだけで避けていたんだと思う。いつか友達になっ
たとしたらみんなに謝らないとな

「那緒くん聞いてた？」

「あ、ごめんちょっと考えことしてたよ」

「それなら良いけど、二人は付き合っていないんだよね？」

「うん。仲良くなりたいとは思ってるよ」

これは本当だ。付き合うとしてもお互いの事は知っておきたい。だから、まず初めて見かけた時から友達になりたいと思ってた。それといつの間にか憧れから変わっていただけ…

「そうなんだ」

そういえばなんでなのは俺のことを名前で呼んでるんだろうか聞いてみよう

「高町なんで俺のこと名前で呼んでんだ？俺たちと話すのこれで初めてじゃないか」

「え、じゃあ、なんで那緒くんは私のこと“なのは”って言うてくれないの？」

ん、なんか噛み合ってたような。言ってたこと分からなかったんだけど…

「中二でいきなり名前って変じゃないか？」

「私たちは話すの初めてじゃないよ？」

あれ？ また噛み合っていない感じ？

なのははまだ話し終えていなかった

「私たちの親同士が仲良いのは知ってる？」

「まあ、今日知ったよ」

「あはは、それで一回だけ那緒くん連れて翠屋に来たことあるんだよ？」

そうだったのか。全然覚えてないな

なのはの話はまだ続く

「お母さんと水香^{みずか}さんは二人で話してたんだけど、私と那緒くんは
同い年ってのもあつて遊んだことがあるの。」

そして、友達の証として名前呼び合おうことになったんだよ。そこで私と那緒くんで大切な約束を結んだんだよ……」

最後のだけは声が小さくて聞き取れなかった。でも、すごく幸せそうな顔だった

ドキッとしたのは思春期のせいにしてく

用は、なのはと俺は初めて会ったわけじゃないってことが。でも、小さい時だよな？

俺が転生者ってことを知ったのは小三で原作では無印始まる時でその前のことを一切覚えてなし、

母さんにすごく心配掛けたのは転生して一番の悔いだ。

小三前に知り合ってたとしたらなのはに悪いことしたと思う。今か

らでも友達になれないだろうか

「高町、名前で呼び合うことは友達の証って言ったよな？」

「うん」

「今からでもなのはって言ってもいいのか？」

「うん！」

「これから友達になってもいいんだな？」

「うん！！ これからずっと私と那緒くんは友達だよ」

今日の出来事があって良かった。どこか頭の中でずっと考えてたことだと思っし、もしかしたら他の人も友達になってくれるだろうか

「ありがとうなのは！」

日付が変わり今日初めての満面の笑みをなのはに見せる

でも、今日初めて後悔することになった

「あ、中川さん？」

「高町さん、それと…君野くん？」

え、まさかの榎奈さん！？ なんでよりによってなのはのこと名前で呼んだ後に出くわすんだだろうか？

まずいぞ、これは確実に二人は付き合ってるルートに思われてないか？

こんなことで初恋終わってしまうのか？

「えっと…「私は那緒くんに家まで送ってもらってるとこなの」っておい。なのは！」

まさかの勘違いされそうな発言ですか！？　これぞ白いなんたらの正体なのか

「そっなんだ…。私もう帰るね。また明日ね」

無情にも榎奈さんは走り去って、待ってと言う前に闇に消え去ってしまった

「行っちゃたね中川さん」

「ああ…」

「じゃ、行こうか那緒くん」

終わったのかな初恋。もうなのはとの友達撤回しようかな？

それはなのが可哀想だ。まだ打開策があるはずだ、明日本当のこと言おう。決してなのは間違ってることは言って無いけど……五話目で失恋って洒落にならないでしょ。失恋したら俺廃人になれる自信があるよ

「ねえ、那緒くんは中川さんのこと好きなのかな？」

「え、別に。いきなりどうしたんだ？」

突然だったから友達についてしまったと思う。バレバレの嘘だったかな？　そこだけ気になる

「そうなんだ。中川さんが走り去った後、那緒くんがすごい慌ててたからそうなのかなって思っただけ」

そんなに慌ててたか？　でもすごいやばいとは思ってたからそれかな

「そうか。あまり気にしないで。」

じゃ、こっちも質問な。なのはには好きな人が気になる人いるのか？」

「ふえ？　那緒くん気になる？」

「うん。聞いてみたいな」

「いるよ。まだ好きではないけど、気になり始めた人がね」

高町なのはも女の子なんだね。中学二年で好きな人の一人や二人いてもおかしくないしね

多分、気になる人は白神大河だろう。あいつは見てくれはカッコいいし

友達のなのはが好きになろうとしてる人だ陰ながら応援してあげよう

そんなことで盛り上がってなのはの家を玄関まで見送って家に帰った

帰った後、母さんに色恋沙汰のことをこつてりと尋問されたのは言うまでもない

夜、家まで送りました。（後書き）

五話でした。

少し間違えました

那緒のお母さんみずかさんのことをすいかとルビしてしまいました。
直しておきます

誤解が解けました。(前書き)

六話です

誤字、脱字、感想等ありましたら感想までお願いします

今回はアリサが登場します

では、どうぞ

誤解が解けました。

あ、こんにちは絶賛鬱状態の那緒です

あれからどうなったって？　なのは奇襲事件&友達出来事の翌日に榎奈さんに本当のことを言おうと思ったけど席替えがあったとです

先生は「そろそろ仲が深まった事だし席替えするわよ」ってあんまりだ

まだ誤解が解けていないって言うのに！！

席替えした結果、俺は一番後ろの窓側で榎奈さんは廊下側の一番前です。誰か絶対仕組んでるだろうってくらい遠い席になった

ついでに隣はアリサだ。昨日のことで俺の隣になった時に鋭い睨みをしてきた。すごい怖かったと思う

言ってなかったけどはやとフェイトは違うクラスにいる。最近このクラスに来てはいないからミッドで仕事だろう。中学二年生なのに仕事って俺にとってめんどくさ過ぎて三日で辞める自信あるわ

昨日から打開策を探してるけど一向に見つからないんだよねー

考えがてら机に伏せてたら寝てしまった。先生に問題を当てられたらしい俺がね

隣にいるアリサは学級委員だから起こそうとして黙ってグーパーして起こされた。昨日の恨みでもあるの？

曖昧な思考回路であってるだろう適当なこと言ったら先生に褒められた

アリサは「なんで寝てたのにあってるのよ」と呟いていた

ラッキー

現在、昼食の時間いつも友達が少ない俺はアリサに睨まれながらご飯を食べるのは重苦しいので空を見ながら食べようとしたでも、外があまりにも気持ち良さそうだからたまには外にでも行つて気分転換しよう

体育館辺りまで来た。その辺で座るところがあるから食べようと思い袋から取り出そうとしたら何やら隣の壁越しで聞こえてくる

「くさん。前から好きでした。付き合ってください」

「えっと、気持ちは嬉しいけどごめんなさい」

告白したようだがうまくいかなかったようだ。振られた奴ご愁傷様男は教室に戻って行く。顔を見てみると確か三組の告り魔の高杉だったはず

そろそろ食べようと思ってたらさっき告白を受けた女子が教室に戻ろうとしていた

高杉同様、顔を見て見ると席替えして謝ることが出来なかった人が歩いていた

「中川さん？」

「君野くん？」

はい、そうです。俺の好きな人の中川榎奈さんなんです勝手に口から声が出てこの後のこと考えてなかった

「さっきの聞いてたの？」

「たまたまここでご飯を食べようとしたら聞こえただけだよ」

「こんなところまで？」

そうなんだよね。適当に歩いてたら教室から一番遠い体育館まで来てしまった

でも、体育館のその辺の木の下で寝るのが気に入りだから知らずに来たんだろう

「外が気持ちよさそうだったから。そうだ、中川さん一緒に食べる？」

「一緒に？」

……はっ！？ 俺はなんてこと言ってしまったんだ

「ごめん中川さん。口滑った」

「良いよ。ちょうどお弁当箱持ってたしね」

お弁当箱を少し上にあげてウィンクした。とってもキュートなんです！！

良かった。これで駄目だったら昨日のことで、ダブルパンチの完全
に鬱病患者の出来上がりだったよ

「ほら、中川さんここ座って食べよ」

「うん。君野さんの隣座るね」

「どうぞどうぞ」

「ありがとう。君野くんのお弁当美味しそうだね」

「そうかな？ 中川さんのお弁当箱可愛いし、とても美味しそうだよ」

「君野くん食べてみる？」

まだで？ 榎奈さんのお弁当を食べれる…だと！？

これは食べてみたい…

いただく前に先にあげるのが礼儀ってもんだよな

「中川さん、あーん」

「あーん！？ あーん」

少しテンパッてたけどあーんは駄目だったのか？ 食べてくれたけど……

「あーんかあ。次は私の番ね君野くんあーん」

うお、これは恥ずかしすぎる。さっき榎奈さんの気持ちはこうだったのかもしれないな
好きな人にあーんをしてもらえるなんて夢にも思わなかったよ

手を添えて少し頬ほほを赤く染めながらにこやかに卵焼きを差し出してる

すごく上品で可愛い

恥ずかしいけどいつまでも待たせるのは榎奈さんに悪い
ふー、心の準備をして・・・よしっ！

「あ、あーん」

おいしいなこの卵焼き。中は程よく半熟のまろやかで塩と砂糖のさじ加減が素晴らしい

「どうかな？ 君野くんよりかは下手だけど」

「そんなことないよ！ すごく美味しいよ」

俺と榎奈さんはお互いに見つめ合いながら

「「ぶっ、あはははははっ」

前の朝みたいに笑い合う二人

これで解決したんだよね？

誤解が解けました。(後書き)

六話でした。

金髪女子に絡まりました。(前書き)

七話です

今回は八話を連続で投稿します

そっちの方が面白いと思うので

まあ、短いという理由もありますが・・・

では、どうぞ！

金髪女子に絡まりました。

おはよう、いつも通り聖祥学園に朝早く来ている那緒です
あれから榎奈さんと仲良くなって俺の席近く通ると必ず声かけてくれる

なんて良い子だ

爺臭いかな？ そんでもって話したこともないアリサさんから最近
声かけられました。なんでだろう？

ケース1

「君野起きなさい！ 次の問題あんたの番よ！」

「ZZZZZ・・・」

「ほら、起きなさい。数学の加藤先生に怒られるわよ」

「ZZ・・・」

―ボコッ

ケース2

「君野、あんたにプリント渡せって先生から」

「ああ・・・」

「聞いてんの？」

「ああ・・・」

「先生にプリント渡されたって言つのよ？」

「ZZ・・・」

―ボコッ

ケース3

「次あんた体育の授業でしょ？」

「そうだった？」

「もしかして、忘れてたの？」

「まあ、ああーどうしよう」

「どうすんのよ？」

「あのさ・・・貸して」

―ボコバキッ

…あれ？もしかして全部俺が悪い？

まあ良いや、次会った時にでも謝っておこう

あ、噂おすれば何とやらだ。アリサが慌てて机の中やカバンの中をあさってる

横目で見ながらどう謝ろうか考えていると、アリサがこっちを向いた

「ねえ、君野あんた今日の数学の教科書持ってる？」

慌ててた理由はこれだったのか。納得、とても言いにくそうに言うてる

どうしてこんな奴に頼み事しなきゃいけないのよみたいなことでも考えてるのだろう

「持ってるけど？」

「その…持ってくるの忘れちゃったのよ」

「貸せと？」

「そう言うことになるわねってなんで殴ろうとするのよ！」

「だって前に貸してって言ったら殴られたし」

「限度つてもんがあるでしょ！！」

ふむ、「冗談はこのくらいにしないと逆に殴られるな。別に今日の数学は寝ようと思ってたし良いんだけど、落書きが書いてあるんだよね。魔王が砲撃ぶつ放す奴とか、ものすごい速さで斬りまくる奴とか、素手で岩をも砕く奴とか。どうしよう、傷つくな俺の体が

「嫌、なら良いんだけど…」

くっ、悲しそうにするなよ。これだから女は困るんだ
これは貸さないといけないじゃないか。後ろの方でなのはさんたちが見守ってるし

「わかったよ。だけど指定されたページしか開くなよ！」

「どうしてよ？」

「どうしても！！俺は寝てるからな」

「わかったわ、でも…あなたも勉強に参加しなさいっ！」

—ボコッ

金髪女子に絡まりました。(後書き)

七話でした。

まだ、続きます

ツンデレは本当にいました。(前書き)

八話です

七話は流れるように読めましたか？

では、どうぞ

ツンデレは本当にいました。

こんにちわ、現在お昼を食べ終わって五時間目の授業をアリサと受けている那緒です

え、なんでアリサと受けてるかって？ それはアリサが教科書忘れたからであって俺がを忘れたわけではない
そう、アリサが忘れたから

二回言ったのはいつも殴られてる恨みなんかでは決してない

「君野あんたまじめに授業聞いているの？」

「聞いているよー」

聞いている風に軽く流す。内容は全然聞いては無い

「絶対聞いてないでしょ。私と先生の話」

「そんなこと無いよ。アリサが言ったのは覚えてる」

「じゃ何なのよ？」

「私はツンデレじゃないって言ってただろ？」

「ひつとも合っていないわよ」

「あれゝそうだったけ？ 本心は合ってるだろ？」

「まあ、ってそんなことより授業を聞きなさい！」

「はいはい」

「はいは一回でしょ！」

「はい、オカン」

実際母さんのことオカンって言わないしね。それに礼儀は俺が母さんに教えてるし俺がいなかった時どうしてたんだろう。明らかに父さんにいったよな

「誰がオカンか！」

「立つな、叫ぶな、目立つだろ！」

周囲の生徒と数学の加藤先生が俺たちを注目する

うわー見ないで！ 榎奈さん、くすくすしないでー

安の序、アリサも周囲の状況を把握したのか顔を赤くし黙って着席する

「あんたのせいで目立ったじゃないのよ」

明らかにさっきよりも声が小さくなってる。ここで更にシンデレに茶化すのが俺流

決して面白そうだからという理由ではない

「ごめんな。でもいつも綺麗な金髪で目立ってるじゃん」

アリサに笑いかける

「き、綺麗…ってばーか！」

俺の教科書を奪い取って真っ赤だろっ顔を隠す

やっぱりツンデレだこの人

それからアリサは名前で俺のことを名前で呼ぶようになった

なぜに？

今日も無事に終わり帰ろうとしてたらアリサに捕まった

「那緒、あんた今日私と日直でしょ？」

「あれ、そうだった？」

今帰ろうとしてんだけど、朝からアリサ一人でやっていたのか。悪いことしてしまった

「ごめん、忘れてた。最後まで俺がやるよ」

「良いわよ。私がやつとくから次はちゃんとサボらずやるのよ」

む、やると言ったのにしょーがない

「二人でやるっ」

「いいわよ」

「なんで？」

「もう一人でやった方が早いから！」

「アリサ、俺は二人でやりたいんだ。朝からやってもらって悪いことしたと思って」

しつこいからつい呼び捨てで言ってしまった

「しょ、しょうがないわね。早く行くわよ」

ふー、これで大丈夫だ。よかった、明日先生に怒られずに済む

「待てってアリサ」

「早く来なさい那緒」

もうこの際アリサって言って良いよね？　アリサも気にしてなかったし

次にバニングスっていったら殴られそうだし

日直の仕事を終え帰ろうとしたらアリサに送ってもらった

車がめっちゃ長かった。あんな長い車初めて乗った。車内がすごい綺麗で良い匂いがした

アリサって面白いよね。もう友達二号だな

ツンデレは本当にいました。(後書き)

八話でした。

勉強会に誘われました。（前書き）

八話でやらかしました

最後の方を抜かしてしまいました…

書きましたので気になる方は読んでいただけると嬉しいです

では、どうぞ

勉強会に誘われました。

こんにちわ、もう五月で五月病にかかっていつの間にかテスト一週間前になってやばい那緒です
どうしましょ？ 転生前にも同じことがあったし五月に嫌われてるのだろうか

転生前の学校は進学校だったから私立よりかは頭が良かったけどこの学校も進学校なんだよね
やれやれまいったまいった。良い点が取れないよ

テストは六月の初めだから得意科目を放置して苦手科目をやるうかそれとも反対に苦手科目捨てて得意科目を満点取るか。あ、得意科目はちゃんとやれば満点いけるよ。中二のテスト二回目だし

思考回路の渦にハマってると隣から救いの手が差し伸べられた

「ねえ、那緒今日から一週間後にテストでしょ」

「うんそうだね。俺死ぬわ」

「そうだと思って休んでた分のノートと今日一緒になのはたちと勉強するんだけど来る？」

ノートを渡されながら聞いている
本当ですか！？ アリサ様っ！ いつもツンデレ乙とか思ってたすんませんでしたっ

「ありがとう。ぜひ行かせてもらっつよ」

ノートを見ている。そしたらすごいんです。細かいことまで分かりやすくびっしりと書きとめられて綺麗というより可愛い字がより華やかさを増している

アリサオリジナルと思わしき問題と次の時のための予習が書いてある

「そう。なら帰り教室で待ってるのよ」

「分かったよオカン」

「だからオカンじゃないわよ」

そういえば誰か来るのか聞くの忘れたなあ
まあ、いいかどうせ帰りに分かることだし

学校も終わって教室で待っているとガラガラとドア開き何人か入って来た

誰かと思って椅子から立ち上がると後悔と嬉しさが混ざって気持ち悪いよ。まだ五月病なんだろうか？

「那緒おまたせ連れて来たわよ」

「ああ、でも多くね？」

メンバーは俺、アリサ、なのは、すずか、フェイト、はやて、白神大河、榎奈さん！！

こんなにいて良いのかな？ 俺抜けた方が良い気がする

「那緒くん今まで休んでたから一週間頑張ろうね」

「なのはちゃんたちもたまに休んでたよね？」

なんで榎奈さんがいるんだろう？ アニメではモブキャラなのに
関わることは無いはずなんだけど
全く周りに違和感がありません！！

「こんにちわ君野くん。私ねなのはちゃんに呼んでもらったの」

なのはちゃんだと！？ もしかして友達になったのか？

「友達になったの？」

「そうだよ那緒くん。私と榎奈ちゃんはもう友達だよ、那緒くんが
休んでる間にね」

なんてこった！！ 俺が五月病にかかってなかったら進展していた
はずなのに五月病のバカやろー

今まで黙ってた白神大河が口を割って来た

「こいつが君野那緒か。しらねえな」

うざっ！ だが俺は大人だ。こんなことでキレるよなやわな人間で
はない

「初めましてかな？ 白神だっけ？ これからよろしくな」

ふっ、見てこれ完璧でしょ？ これが大人な対応だ

「なあ、アリサこいついなくても良かったんじゃないか？」

俺のことガン無視ですか

「そういうこと言っちゃ駄目だよ大河くん今まで学校休んでたんだからみんな協力してあげなきゃ」

「そうよ、もともと誘おうと思ってたし、学校休んでて言えなかったから今日言ったのよ」

白神大河うざすぎる。何回も言っでごめん。がしかぁーしまだ平気だ。俺は自称空よりも広い心の持ち主なのだからそれにアリサやずかもフォローしてくれてるし

白神大河は手に顎を乗せて考えてる仕草をする。少し間が空き口を開く

「やっぱりお前はいらねえよ」

ープツン、もう良いよね？ 結構頑張ったよ俺

「上等じゃねえか表に出やがれっ！！！！」

女子総出で俺を抑えるがキレた俺はそんなことでは止まらない一発あいつに殴らないと腹の納まり具合が悪い
だが、アリサによって喧嘩両成敗されて一発ずつ殴られた。ぬう、アリサめ俺は何もしてないのに

これから君野那緒と白神大河は絶対に仲良くなれないとこの場の
全員誰もが思っていた

勉強会に誘われました。（後書き）

九話でした

八話のことスミマセンでした。

告白しました。(前書き)

十話です。

この回は那緒がやらかす話

では、どうぞ

告白しました。

どうも、こんにちわ白神大河に喧嘩売られた後アリサたちに抑えられしぶしぶ殴るのを止めた那緒です

現在、アリサの車で翠屋に向ってる。近いのに…

運転手の人が迷惑だろおお！！　と思つてアリサに聞いてみたら運転手が睨んできた

なんでっ！？　俺悪くないよね？

「那緒くんは甘い物平気？」

甘いものか。確か翠屋のシュークリームは大好物だけどあまり食べないな。翠屋に通い続ければ甘党に入れるかもしれない

「翠屋のシュークリームは好きだよ」

この言葉に満足したのかなのはは笑顔でありがとうって言ってくれた。うん、可愛い

…あれ？　最近なのはのこと気になりすぎてない？

うん、大丈夫だ！　好きなのはなのはじゃなくて榎奈さんだ。なのはは友達であつて決して好きではない。そう好きなんかじゃない。大切なことなので二度言つてみた

「那緒、あんたいつも勉強道具を置いてきてるけど持つてきてるんでしょうね」

今度は前の席から振りむいてアリサが言つてきた

「当たり前じゃないか。何言っただよアリサ」

アリサに向って嘲笑うかのように笑って見せる

今の俺の立場を考えてみれば持つてこないと相当まずいことになる。
今日は金曜だし忘れたら土日の時、勉強が出来なくなってしまう

そう思っただ膝の上にあるスクールバックを開く
隣にいるのはが俺とアリサのやり取りを気になったのか榎奈さん
と一緒に覗いて来た

榎奈さんはなのはの隣で俺となのはを挟んで座っている
ふむ、なのはめ羨ましすぎる

バックの中見わあゝ…持ち物は悪いけどなのはに持つてもらおう

・筆箱 ↑ これはいつも入れっぱだから特になし

・メモ帳 ↑ 晩御飯の材料が書いてある

・財布 ↑ 買い物時の必需品

・ガム ↑ 俺の口が欲しがってるんだよ

・PSP ↑ たまたま入ってたただけだよ？ 決して昼休みがひまだ
なあって思っただ使っただなんかないよ

「よくわかったわ那緒」

「あはは、那緒くんはバックの中も那緒くんなんだね」

「君野くんはこれでいいのかな？」

う、うるさい。それでも覚えてたんだぞ勉強に誘われた時までは…
それと榎奈さん、逆に辛いです。憐みの顔を見せないでくださいよ

「大丈夫！ 今すぐ学校に戻って取りに行くよ」

「あのー今日は職員会議で教室はもう使えないよ」

一番後ろに座ってるすずかが言ってきた

「あれそうだった。どうしようかな？」

「はあ、しょうがないわね。今日私の家で泊まりに来なさい。みっ
ちりしごいてあげるわ」

「良いな。俺も言ってもいいかアリサ？」

「そうね。どうせだったら皆で泊まりなしょ」

「ありがとなアリサオカン」

「だからオカンて言うな！」

アリサは良い奴だ。普段はツンツンしてるけど根はかなりの面倒見の良さだよ。良いオカンになれる

これから二日間アリサ家にお世話になり勉強会します

そういえば榎奈さんも泊るんだよね？ めっちゃラッキーじゃん。
アリサ様さまだ！

泊るとは言ったものの男女比違過ぎるでしょ。2対6だよ、俺と白神大河は犬猿の仲だし実質1対6かぁ。それと初めて話す人いるしはやてとフェイトね

そうだ。友達の家に泊るの初めてだ。

最初に泊る家が女子の家かぁ〜悲しすぎる

今、翠屋にいます。桃子さんすごい綺麗だった。土郎さんに「なのはとの関係は？」ってすごい形相で言われたから「白神くん以下です」って言っただけ。嘘じゃないしね

さっき桃子さんに母さんによろしくと言われました。そして桃子さんが去り際に店で使えるわねと言ったのは幻聴だろう

女子と白神大河は勉強しないでしゃべってる。俺も土郎さんの正面のカウンターでまだ俺には少し苦いコーヒーをすすっている。そろそろ五時か母さんに晩御飯作らないとな

「那緒くん。そわそわしてるけど、どうかしたのかい？」

「いえ、母さんのご飯作らないとなって思っただけです」

「そうかい。ここで作って行くと良いよ」

「良いんですか？ いえ、遠慮します。初対面の方の家で勝手に上がり込めませんよ」

あれ？ 土朗さんの顔が少し引きつったような

「む、そうか。でも気にしないで作っておくと良いよ。なのは、那緒くんにキッチンまで案内しなさい」

「はい。那緒くん行くよ」

「すみません土朗さん。キッチンお借りします」

そう言っただけで待っているのはどこまで行ってキッチンに向かった高町家の分も作るのが礼儀だよな

「ここだよ那緒くん。冷蔵庫の物勝手に使っても良いよ」

「ありがとうなのは」

「いえいえ、私はリビングでテレビを見てるから何かあったら言うてね」

「わかった」

何回か見たことある風景に俺がいるとちょっと不自然だなと思いつつ冷蔵庫に手をかける

今日はあまりコストはかからずなおかつ高町家に満足させれるようなものを作らねば

メニューは決まった。生姜焼き、味噌汁、ご飯、王道だね

それにしても人が良すぎるよな土郎さんも桃子さんも

桃子さんにはお土産にイチゴのショートケーキとシュークリームも買った

豚肉を炒めつつどんどん工程を進めていく

「那緒くんは一緒にしゃべってなかったけどなんで混ざらなかったの？」

「うーん。なんか入りにくい」

「なんで？」

「なのはやアリサは普通にしゃべれるけど他の人はしゃべりにくい」

白神大河とは仲良くしゃべってるなんて想像もできない。気持ち悪い

「そうなんだ。気にしなくて良いのに。それと榎奈ちゃんとは普通に喋れないの？」

「少しだけなら平気」

恥ずかしすぎてまともに顔も見えて話せない
あれ？　なのはに相談されてる？

次は味噌汁を作るためにあらかじめ切っておいたわかめ、豆腐を
お湯の中に入れる

高町家はうす味かな？　それとも濃い味かな？
俺んところは少し濃いかな
聞いてみたところ少し薄いそうだ

家で作るより味噌を少量を減らして鍋の中に入れる
うん、生姜焼きの香ばしい香りがし始めた
今だな、隠し味に塩水に漬けておいたリンゴをフライパンに入れる

「那緒くんは今日一緒にいる中で好きな人はいるの？」

「どうしたんだよいきなり」

「にやはは、そうだね。今やってるテレビが恋愛番組なんだよね」

なのはが言いながらキッチンに来た

「へーどういう奴？」

「良い匂いだあ。うんと、ねー単純な学園物で主人公が好きになった子が繰り広げるドラマかな」

「面白そうだね。それとさ、さっきの質問だけどいるよ」

友達には言ってもいいけどただで教えるのはなんか勿体ないからなのはの気になつてる人をつきとめてから教えよう

「榎奈ちゃんでしょ？」

……あれ？ 一発で当てられたような。気のせいだよな？

「さっ、作り終えたし家に持って帰らないとな」

「榎奈ちゃんなんだね？」

「さ、さあ？ どうか」

もうこれはなのはのワンサイドゲーム答えなければ命が無い。教えてもらってから教えるのに今ばれたら意味が無い。

なのはがどこことなく悲しそうだけど今の俺には関係無い。その内武力行使に出るだろうお話という名の精神破壊が

うん、そうだ！ 今の現状を整理しよう

- ・高町家のキッチンで二人きり
- ・ここでやらなきゃやられる（ばれるという意味）
- ・デバイスは持ってない。てか使えない
- ・相手はエースオブエースになるお方

整理した結果

絶対に勝てないよねこれええ！！

いや、くそが付くくらい弱い俺でも頭はどうにかなるんじゃないか？
仮にも人生は二回やってるんだ。なのはの倍は生きてるんだ経験では俺の方が高いはずだ
でもどうしたらなのはに榎奈さんのこと好きってばれずに済むか

ポク ポク ポク チンっ！

なのはは女の子だとても可愛い。って今は関係ないし。これを逆手に取ってばれずに済む方法は

「なのは好きだ!!」

なのはに近寄って両手をなのはの肩に置きなのはがドキドキする程度のとこまで顔を近づける

少しせこいと思うけどこれもばれずに済むためだ、なのはごめん

「ふえ？ ふええ〜!？」

「ごめん。一回家に帰るな！ みんなに言つといて」

料理をタッパに入れて持ち去る。なのははキッチンで尻もちをついていた。告白を受けられたもんな、無理も無い。俺も恥ずかしいよ

え、告白？ 初めてですけど

告白しました。(後書き)

十話でした

ここからは長くなります。付き合って頂けたら嬉しいです

後悔しました。(前書き)

十一話です

今回はユーナが出ます、そのことでの注意点。

ユーナは自分のことを漢字の名前で呼びますが那緒はユーナと呼びます

とりま読んでください

ではどうぞ

後悔しました。

初告白をした後、走りながらなのはにばれないためとはいえ告白してしまったことを思い出して恥ずかしくなった那緒です

次になのはに会うことを全くもって考えていなかった自分に後悔まぢありえんていただけでもしもだよ。もしなのはが俺のことす、好きだったらすぐくまzukない？

本当のこと言えないよね！？

「ぬわあああー！！」

いつもはこんな声は出さないがしょうがない。周りの奇異の目ばかりあえず、いらいらしてるから無視

一層、走るのスピードを上げていらいらを振り払おうとする

すっかり走るのが疲れとぼとぼ歩いていると家に着いた

母さんはこの時間帯ーだいたい今は三時くらいかなーは仕事をしてるからいない

机に置いてある紙で勉強会のことを書きとめておく

二階に上り自分の部屋に入る。いつものようにデバイスではなく、人間の姿でテレビを見ながら和んでいた。ユーナはユニゾンデバイスじゃないからユニゾン出来ないから初めて知った時はびっくりし過ぎて解体しかけた。別にデバイスマスターじゃないよ？ そんな

の幼稚だった頃の俺なんかに出来るわけ無いじゃん。今もだけどね。話がずれたけどユーナはインテリジェントデバイスで何故か人間の姿になれるってこと！

機能は人間に例えると、テストしたとして今のアリサよりちょっと頭が良い程度かなノウ勉でね
そりゃそうだよねデバイスだし

容姿としては俺と同じくらいの身長で目は黒色で髪は茶色があった黒色で髪を下ろしている

どうにかして人間にしてやりたい。神でもいればなあ

俺は神はいないと思ってる。いないと転生は出来ないって言う人が多いけど神がいないと転生出来ないと言断言できる人もいないと思う

それよりもユーナに勉強会のこと言わないとな

「おかえり〜那緒。いつもより遅いねえ〜彼女とデート？」

仮にもマスターの俺に呼び捨てだな。少しはレイジングハートやバルディッシュを見習えっ！！とは思わない。自分にとってはユーナはデバイスじゃないあの時からそう決めたんだ。ユーナは家に居る時、主に暇な時は人間の姿でうるちよろしたりしてる

いわゆる二トってやつだ。ユーナは違うっていうけど

母さんもユーナのことは知っている小五くらいから。このことはまた機会がある時に話すでしょう

母さんがユーナのことを知るってことはなるべく不自然の無いようにするために幼稚な脳味噌で精一杯考えた結果、ユーナを日本人の孤児にしようってなって名前を考えた「結菜^{ゆうな}」ってなった。カタカナを漢字に直したただけだけどユーナはすごく気に入ったようで決め

た時、抱きついてきたのは良い思い出

「ただいま。てか彼女いないし」

「リア充爆発しろー」

「しちゃえー」

ユーナは遊んで言ってるけど俺は割と本気！

「そうだ、今日から友達ん家で勉強会するから二日間いないから」

「えー二日間も那緒いないのー」

「そうだけど、その間母さんのことお願いな」

「やだー結菜も那緒と一緒に行くー」

「お前は子供か！ 今度埋め合わせするから」

いやいやユーナは了承してくれた。本当にデバイスかってくらい子供っぽいけど可愛いから許す

「ごめんな。それと埋め合わせの足しに翠屋のシュークリームとケーキ貰ったから母さんと一緒に食べるんだぞ」

「シュークリーム！？ やったー早くみーちゃん帰ってこないかな？」

テンションがハイだね。うん、すごくはしゃいで可愛い。ユーナは

シュークリームが大好きだ母さんの次にな。

え、俺？ 知らないよその次じゃないの？

「じゃ、俺行くから」

「行つてらー」

二日分の服を持って一階に下りていくと電話が鳴っていた

「もしもし、君野ですけど」

まあ、常識人の俺ですからこのぐらいたやすぎるくらいかな

「もしもし、那緒ね？ 今私ん家にみんないるけど家どこか知らないでしょ？」

常識人の俺としたことが名を名乗らない詐欺がいるとは知らなかった

「プー、現在おかけになったお電話は電波の届かない場所にあるか、存在しないかです。迷惑電話は困ります。こっちの立場を考えてください。お願いします」

「留守電に愚痴られた揚句お願いされた！？ ってか那緒いい加減にしないで！」

今あんたん家の前にいるんだから。それとおく何でも言うこと聞くのよね？」

「くそっ！ はかったなあああ、ありさー！！ 何が何でも逃げ切つてやる」

なんて策士なんだアリサ・バニングス口では勝てないと知って車まで用意して家を包囲するなんて

「あんた、本当は私ん家に来たくないんでしょ？」

「そんなこと無いよ？」

「本音は？」

「アリサの奴隷まがいなんてなりたくない」

「…わかったから早く来なさい。まだあんたすずかたちに自己紹介してないでしょ？」

おーそうだった。俺は知っててもあつちは知らなかったんだ
だから知らない三人は俺に話しかけなかったわけだな納得

「今から行くよ」

「早く来なs」那緒おーすごい大きな車が止まってるよ」いよ。
…那緒今のは誰ーガチャ」

さあー行くかゝさっきのはなかったなかった。少しなのは式のお話をユーナにしくなくちゃなゝ

楽しみだあゝ。この後アリサにどうされるんだろ…

「やーアリサおまたせって、うおーあぶねっ！ 出てきてそうそう殴ろうとするなよ！！」

「なにがおまたせよ！ 三十分もまたせてたじゃない！」

たくっ、器の小さい女だ。これだともてないぞー

「別にもてなくて良いわよ」

「読心術！？」

「思ってること声に出ただけよ！」

「あれ、車はどうしたんだ？」

「あんたが遅いから鮫島が夕食作りに行ったのよ」

「仮にもツンデレで残念な奴だけどお嬢様なのになあ？」

「なんでそこで私に振るのよ！ ツンデレで残念な奴じゃないわよ！
元はと言えばあんたの所為でしょうがああああ！」

「まあ、なんて子、そんな残念に育てた覚えはありません！」

「あんたに育てられた覚えもないんだけどねえ」

いじりすぎた。楽しかったけど、そろそろ行くかアリサも可哀想だし

「よし行くか！」

「ほんと自分がつて何だから！」

「またせた分、今度どっか行こうか？」

「そうね。そのぐらいしてもらわないと待ってた私が報われないしね。それと全部那緒の奢りだから」

なんですと！？ ユーナとアリサの分は中二の俺には重荷だぞ

「……わかった。行こう」

「なんで奢りで涙目になるのよ」

うう、買いたいマンガあったのに。こうなったら

「って、待っててあげたんだから先行くな〜」

「ふっ、はっはっはっは。今の俺に追いつけると思うなよ!」

俺のマンガ…来月絶対買ってやるからな!、待ってるよ!

「あんたが待ちなさい!」

走るのが疲れてアリサと一緒に歩いている。追いついた時ドロップキックをされたのは言うまでもない。アリサ女だろあんた…

「ねえ、那緒、あんたなのはに告ったでしょ？」

そんな、もうばれてるのか！？ 榎奈さんには伝わって無いだろうな

「なんのことだかさっぱりだ」

「尋常じゃない汗とこっち向いて話さないのはどこのどいつよ」

く、どうする君野那緒。完全に詰みだぞ

「……」

「黙ってるのね」

これはまたあの究極の技を使う時が来たか

「アリサ前から好きだ」

「あーそう。ありがとね」

「俺の告白がいとも簡単に流されただっ！？」

「やっぱり那緒だからそういうことだと思ったわよ。なのはのも本気じゃないんでしょ」

「はいそうです」

「なんでそんなことになったのよ」

「好きな人ばれそうだったから」

「そんなことで告ったの？」

「そんなことだとっ!？」

なんてやつだ。今まで友達だと思ってたのに

「そんなことよ。あんたは友達だけどなのはも同様に友達なのよ。あんたが素直に言っていればなのはは傷つきしなかったのよ。それとあんたもね」

うう、何も言い返せない。アリサは友達思いだな

「どうしよう、アリサあゝ」

「しょうがないわね。まず家に着いたらなのはに本当のこと言うのよ」

「ぐっ、わかった。ありがとなアリサ」

歩くのが重く感じる。最初から素直に言っ
てれば面倒なことにな
らなかったのに…

それとアリサに好きな人一発で当てられました

俺って分かりやすいのかな…

後悔しました。(後書き)

十一話でした。

その次は波乱の展開になるでしょう。お楽しみに!!

最近調子に乗ってる気がする…

だが気にしない! どんなに批判が来ようがなあ
実際、きてませんけどね。ありがたiii

誤字、脱字、感想等ありましたらお願いします

お泊り、一日終えました。（前書き）

12話です

ううゝ遅れてすみません。模試やらテストやらで更新できませんでした・・・

本当にすみませんでした

これからもこういうことが受験が終えるまで続くと思いますが分かってもらえるとうれしいです

では、どうぞ

お泊り、一日終えました。

「俺、二年二組の君野那緒。呼び方は何でもいいからよろしく」

知ってるとはいえはじめて話す人が何人かいる。少し声がこわばってしまっただが大丈夫だろうか

「私はフェイト・Ｔ・ハラオウン、隣のクラスの二年三組。よろしく那緒」

「フェイトちゃんと同じクラスの八神はやてやよろしくな。那緒くん」

「私は月村すずかだよ。同じクラスだよねっ」

ただいま自己紹介が終わりました。自己紹介はあんまり得意じゃない那緒です

そういえば白神大河が出て無いけど「お前なんかに話すこと無い」ってさっ！

チツ、こつちから願い下げだし。べ、別に話したいわけじゃないんだからねっ

……男がやると社会的にまずい気が。やってるアリサは尊敬するよ

そんなことよりも！ アリサン家について本当のこと言おうと思っ
てなのはを探したのに見つからなかったんだよね……

夕食の時見つけたつと思つたら露骨に隣に座つてゐる榎奈さんと話してこつち向かないんだよ。今は食後の休憩でそれぞれ話してるもしかして俺のこと嫌いだったのかな？

そんなこと無い！！

―チラ（なのはを見てみる）

―サツ（顔を背ける）

そんなことないよね？ あれ、なんでだろう目頭が熱くなっているような…

「どうしたの那緒くん！？」

「いや、なんでもないよすずか」

「那緒くは好きな人いないんの？」

「はやてちゃんいきなりそれはやめようよ」

はやての発言にすずかは呆れたようだったが少しは氣になって那緒の顔を見る

「まあ、その話はまた今度でそれより、あれ？ なのはたちいなくなつてるけどどこ行つたか知ってる？」

はやてたちの方を向いているといいつの間にか二人の姿が消えていた

「なのはたちなら自分の部屋に戻るって行ってたよ」

フェイトは自己紹介の後なのはたちと話をしていたらしく場所を教えにくれた

「そっか那緒くんは二人のどっちかが又ツッフ」

「はやてちゃんその笑い方怖いよ」

「むう、那緒はなのはか榎奈が好きなんだ…」

さっきまでどこかに行って戻って来たらしくアリサが聞こえないぐらいの声で呟いていた

「俺も部屋に戻るのかな」

そう言って椅子から立ち上がり部屋から出ようとしたら、高貴な金髪さんくらいの高い声が俺の名前を呼んだ

「那緒っ！」

「ん？ 何アリサ？」

振り向くとアリサは顔を少し赤く染めて座ってる周りのすずかたちから子を見守るような目で見守っていた

「あ、あの〜どこ行くの？」

「部屋だっで行ったじゃん」

「そう…私も行くっ！」

何この可愛い生物。えっ、今デレ期なの？ 何デレ？ どこにデレる要素あつたんだ？

うーん、でもなのは部屋行ってくて言ったらツンに戻りそうだし、しかし嘘はつけないよな

「別にいいけど、アリサが来たら気まずいかもよ？」

気まずいよね当事者じゃない人たちにとっては…本人はそれ以上に気まずいけどね

アリサも気まずいし、榎奈さんも気まずいし、なのはも気まずいし、俺も気まずいよな

みーんな気まずいっ！！

って現実逃避してる場合じゃなかった

「あ、あれね。やっぱいいわ。行っても良いわよ」

「おう、ありがとつなアリサ」

見えない見えない周りの人たちがごみ虫を見るような目で俺を見ていることを俺は見えて無い

そんな周りの視線に逃れるためにダッシュで部屋から出て行った

そういえばなのはと榎奈さんの部屋聞いてないや。ついでに俺が寝る場所どこ…

後先のことを考えず後悔しているとＴ字路の廊下の右側から綺麗な茶髪にどこぞの淫乱フェレットに似た柄のパジャマで俺の目的の人が歩いていて。あ、俺が歩いてるのはＴの下の方ね

「その茶髪のお姉ちゃん迷子になったんだけどどうしましょ？」

「あらゝ迷っちゃったんだねゝ」

今まではなしてなかったのに奥様風な口調で陽気に話す

「あはははは」

「にやはははは」

「あははは…」

「にやははは…」

―ダッ

告白された人といるのが気まずかったのかなのはまっすぐ彗星の如く走り去ろうとしている

「なっ、なんで逃げるんだよ!」

「いやああああ!― こっち来ないで―」

「すごい言われようだなおいっ!」

もうこうなったらリアル鬼ごっこだ。なにがなんでも捕まえてやる

「いや―来ないで―」

「待てこのやろ」

「もうこうなったら女子トイレへGO!」

「そっはさせるか―!」

なのはよりも全速で走り女子トイレのドアをなのはが駆け込むより先に閉める

「ハア、ハア、ハア…なのは―やっと捕まえた」

「ひいー」

俺の荒い声といつもより鋭い目で若干なのはが涙目になっている

「ふー、話を聞いてほしい」

「も、もしかして逃げたこと？」

「違う！ 告白のこと！！」

「にゃ、そっち！！？？」

一瞬にして顔が真っ赤になったなのは。ついなのは天然のボケに大きな声を上げてしまった恥ずかしい

「うん、とっても大切なんだ今後の俺たちにとって」

「ふえーわかったあ／＼」

さらになのはが耳までも赤くし顔を下に向け体がもじもじしている

「じゃ、誰もいない静かな場所で話そう」

「う、うん」

なのはが決意したような目で上目で見上げてくるのにドキッとした

風呂を入ったのに走り回ったせいか風通しのいい場所を選んで勝手にテラスを借りた
ちよつとさっきなのはに言ったこと思い返したんだけどあれって

告白に近いよねっ!?

気のせいだよね。なのはだってふつ

モジモジ、ニヤァ、ポンッ

うだし…平気平気!

ハア~~~~~

テラスに着いたけど二人きりの話し合いってまずくない? すごい恥ずかしい?

だけど話さなくちゃ! 全ては自分がまいた種なんだし

その前に外に出て十分ぐらい。そこは突っ込まないで十分かけて決心したんだから!

さすがに5月だからってまだ肌寒いしなのは薄いパジャマだしいつもパジャマ代わりにしてるパーカーをなのはの方にかぶせる

「え?」

「寒いだろ？」

「うん。ちょっとね」

俺のパーカーでぬくぬくするのは、それに対してパーカーを渡すのが精一杯のチキン野郎

「あの、さなのは」

「な、なにかな、那緒くん？」

——わざと顔が見えないようにフードをかぶるなのは——

「俺たちにとって大切な話あるって言ったじゃん」

「うん」

——ついで下を向く。胸の鼓動だけが高まる——

「今まで待たせてごめん」

「うん」

——ごまかすことはいえ告白したことを思い出す——

「言う決意が出来た」

「うん…」

—— 顔が赤かったけど、どことなく嬉しそうにしてたなのはの
顔 ——

てしまったらもう… ——
—— 言っ

“友達”ではられないような気がする ——
—— 今までの様な

「だから言わせてほしい」

—— どんなに嫌われたって良い、軽蔑されたって良い、
俺が悪いのだから ——

「ごめんなのは！ あの告白は違うんだ！ 誤魔化すためにいつ言っってしまったんだ」

本当はこれだけじゃない。怖かったんだ俺から友達たち、好きになった人が遠ざかって行くことを

「だから好きな人は…なのはじゃないんだ」

「・・・」

驚いて目が見開いている。すぐ落ち着いた顔に戻り顔を下に伏せてしまった

「で、でもなのははすつごく良い友達で親友って言っても良いg」
「やだぁ！！」らいだぞ。え？」

今度は14歳とは思えないくらい子供っぽい口調で、でも真剣な目で大人っぽい顔に変わった

「私は那緒くんのが好き！ 大好き！！ あの日からずっと…。小2で初めて会った時から。那緒くんのがずっとずっと大好きなの！！」

変わらず子供っぽい口調だけどどんだ俺のことが好きかわかるそして、今の言葉でなのはを送った夜の日のから引つかかったものがスッと消えた

そう、まだ俺が転生する前のこと。なのはが言ったあの日は…
小さい俺、正確には俺であって俺じゃない人格は違っても体は同じ。
子供の俺が無意識のうちに体で反応して記憶を蘇らしたんだ。

そして、昔の俺に変わる

月の明かりが雲に遮り少し暗くなり

月明かりが那緒の顔を照らす

そこには満面の笑みを浮かべる那緒の姿

「なのはちゃんあそぼっ！」

「えっ！？」

お泊り、一日終えました。（後書き）

12話でした

久々にかけたので文法などめちゃくちゃですね。キャラ崩壊だし。
r z

少しミニアンケートなんですが、これ以上転生者は出さない方が良
いでしょうか？

それとオリキャラなら平気と思う人

？出す出すっ！

？出さないほうが良い

ここからは下の問いで

？オリキャラ賛成！！

？オリキャラ止めとけお前じゃ技術不足だ！

？作者が勝手に決めろやどっちとも

メッセージか感想に「ミニアンっ！」で書いてください。
それと誤字、脱字、感想等ありましたらお願いします

今回遅くなつてすみませんでした。前書きにも書いたとおり作者は
今受験シーズンですからあまり書けないというショッキングな時期
です。誰しも通る道ですので温かく見守ってくださいね

しいです

それと、「ミニアンっ！」の発表については集まり次第発表させていただきます

まあ、集まらなかったら自分で決めます。アンケートとかやってみたかったんです！ 作者と読者の交流だと思ってお願いします

長つたらしくすみませんでした。次回の話は一章で例えると最終場面！ 近じか那緒を転生した神が来るはず！

今適当に考えた一章「記憶となのはの物語」多分不採用

なのはがヒロインばいが最初だけ。すぐに可哀想な位置に行くはず

ではまた

記憶無くしました。（前書き）

十三話です

アンケートは閉め切りました。後ほど発表します。

感想くださった方ご協力ありがとうございました

少し独自解釈があります

では、どうぞ

記憶無くしました。

「なのはちゃんあそぼっ！」

「えっ!？」

どういうこと？ さっきまで下を向いていた那緒くんがふつと雰囲気
気がまだ声変わりしてないくらいの声から、急に小学校くらいの可
愛い声に変わって今みたいなことを言った

正直、何が何だかまだ自分でもわかって無い。私が那緒くんに振ら
れてしまった。

振られてしまったけど私は那緒くんのことが出会った時からずっと
好きだった

那緒くんに出会った頃の私の家庭は家族みんなが忙しくて小さかつ
た私は家族の中では何もできない邪魔な存在何だと思ってた。久し
ぶりにお母さんが休日が取れてお母さんの友達の水香さんみずかが家に訪
ねに来た。

「桃子ちゃん来たわよ」

「水香ちゃん久しぶり」

この頃からお母さんと水香さんは仲良しで小学校二年生だった私に
とって引っ込み思案な私にとっては友達がいることはうらやましい
の言葉以外、何も見つからなかった

「あら、この子がなのはちゃん？　可愛いわね〜大きくなったら絶対美人さんになるわね。」

「もう士朗さんがデレデレでね困っちゃうわよ。那緒くんも可愛いわ」

「もうなのはちゃん予約したいくらいだわ」

「あらあら、なのは水香ちゃんと那緒くんに挨拶しなさい」

「こ、こんにちわ。たかまちなのはです」

多分私のあいさつはとても小さくて誰も聞き取れなかったはず、お母さんも苦笑いだったし

「たかまちなのは？　良い名前だね！　僕はきみのなよろしくね。なのはちゃんっ」

でも、那緒くんは私の小さなあいさつを大きな声で返してくれた
私は大きな声に肩を震わせお母さんの後ろに隠れてしまった

「なのはどうしたの？　そんなに怖がらないで良いのよ。もうなのはと那緒くんは友達なんだから」

「ともだち？」

「そう、那緒くんもなのはのこと名前で呼んでくれたでしょ。名前で呼び合つのが友達なのよ」

「うん」

「だからなのはも那緒くんのこと友達になりたいと思うなら名前です
呼んであげてね」

お母さんの言葉は私が初めて魔法と出会ってフェイトちゃんに同じ
ことを言っただよなあ

そして私はビクビクしながらも那緒くんの目の前に立った

「なおちゃんその…」

この頃は那緒くんのことを声や服も女の子用の服を着ていて本気で
女の子だと思っていた。もうさすがに中2で言えないし、言ったら
那緒くんが何をするかわかったもんじゃないよ

「ともだちになって！」

「もうともだちでしょ。なのはちゃんあっちであそぼっ」

「うんっ。なおちゃん」

私はこの言葉がともうれしくてなおくんに手を握られながら家を出て
行った

その時のうれしい気持ちはもう好きに変わっていて私の初めての恋
がスタートした。私にとってのかけがえのない大切な人、大事な気
持ちなんだ……

はじめまして高町なのはです

那緒くんの記憶が無くなったと知って急いでみんなに知らせた。みんなは心配していたけど特にアリサちゃんがすぐに病院に連絡しなくちゃって慌て携帯電話のように耳にテレビのリモコンを当てたでも、すずかちゃんがもう遅いから迷惑だから明日にしようと必死に説得してくれた

フェイトちゃんと榎奈ちゃんがもう那緒くんがうとうとして眠たそうだからともうひと押ししてくれた。それに折れたアリサちゃんは明日午前中に病院行くわよと言っていた

その頃大河くんはお腹を抱えて地面に這^はいつくばって笑っていた。アリサちゃんがそれを見てお腹にキックした。そしたら大河くんが動かなくなってしまった。良い薬だと思い那緒くんの記憶が戻ったからお話をしようと思う

その後、別室に移りなんでこんなことになったか聞かれてお茶を濁すように言っただけみんな私が那緒くんのことが好きなのを知っていた。みんなには水臭いと言われ正直申し訳なかった。大河くんは地面に倒れて置いてきて、榎奈ちゃんはもう少し那緒くんの場所に残っていると行ってこの話は聞いていない

ちょうどこの話が終わった直後に榎奈ちゃんと眠そうな那緒くんが手を繋^{つな}いで入って来た。少し羨ましいと思ったのは秘密

那緒くんを寝かせるために部屋を用意しようと思ったからこの際、みんな寝ようということになった

そこで問題が起こった。那緒くんが急に目が覚めて私と寝たいと言

い出した。いくらなんでもそれははずかしいよ
もしかしたらなんかあっちゃったりしちゃうかもしれないし、私は
そんなことしないよ！ 絶対にね！！

そういうことにすごく敏感なアリサちゃんはさすが反対。はやて
ちゃんは私にちよっかい
でも、那緒くんが素でアリサちゃんに涙目をお願いしたらOKして
くれた

って、私の気持ちは尊重しないのっ！？

結局那緒くんと一緒になることになってしまい私は胸の鼓動で寝れ
そうにありません

アリサちゃんの家って大きくて良いよね。すずかちゃん家も大きいし、フェイトちゃん家はマンションで憧れだし、はやてちゃん家はお屋敷だし、私ん家も道場があって小さくは無いと思うけどやっぱりアリサちゃん家は便利だなあって思ってしまった

为什么呢？ それは私が恥ずかしすぎるからわがまま言っただけで大広間で寝ることになった。その時のアリサちゃんがすごい速さで対応してくれた

もちろん大河くんは一人で客間で寝てもらったことになったよ。フェイトちゃんとはやてちゃんがすごく残念そうな顔だったから、大河くんのところに行ってくればと言ったら二人とも顔を真っ赤に行かないと言った

もう那緒くん（精神小2）は寝てしまっている
今日全く出来なかった勉強を急遽（きゅうきょ）することになった。けどもう私

も含めてうたた寝してるけど揺すったり、ほっぺをつねったりして勉強する始末

「アリサちゃんももう2時やから寝えーへんか？　もうみんな限界見たいやし」

「そうね。さすがに寝ましょう。明日もあることだしそれに那緒、のこともあるしね」

「みんなお疲れ様、今日誘ってくれてありがとね」

「いいのよ榎奈、今更もう友達でしょ」

「そうだねハハっ。これからもよろしくね」

かわいいなあ榎奈ちゃん。那緒くんが好きになるのわかるよみんな「いまさら」と笑いながら仲が深まるのが見えてくるもうそろそろ限界なのはみんな同じ。このままだと女子会になりそう

「もう寝ようよ女子会になっちゃうよ」

すずかちゃんも私と同じ気持ちだったように寝ることを勧める

「そろそろ電気消すわよ」

那緒くんは何かあった時のためにドアの目の前で少し間が空いて私の布団で寝ることになった

『おやすみ』

明日も楽しいことがあるといいな。何よりも那緒くんが早く治りま
すように

記憶無くしました。（後書き）

ミニアンっ！ 発表会パチパチパチっ

？ 0 人

？ 3 人

？ 3 人

？ 0 人

全体的に少なかったけどめげないよ。これからもやると思うんで次回に参加お願いします！

それと桃子さんや一人称とかキャラ崩壊何ですよね。うん、わからんな

勉強しませんでした。前編（前書き）

14話です

今回はシリアス多め。大河の好きな人が明らかに！ それとすつこい鈍い人じゃなければアリサの好きな人も分かるかも。まあ知っている人もいますけど

初めての前後編。ただぐだぐだになりすぎたから区切っただけなんだけどね

なのはと大河には何気な共通点が明らかに
ネタばれが多くなりそうなのでこのへんで

では、どうぞ

勉強しませんでした。前編

大分過ぎやすくなった季節

いつもより遅く寝たせいか少し起きるのが遅くなってしまった精神的にみんなより疲れてしまいこんな目に逢ってしまった。アリサちゃんたち誰でも良いから起こしてくれれば良かったのに・・・

どうして那緒くんが私の布団の中にいるのっー!!

那緒くんからの告白こゝろの時よりも整った寝顔うつつがすぐ目の前にある

こ、これは…可愛すぎる

ん？ でもこれって第三者が見たら誰でも私が那緒くんと寝てたっ
てことになるよね!?

那緒くんの外見から見てみれば学生的にまずい状況で、中身から見
てみればシヨタコン?

こうしちゃいられない早く起きてみんなの所行かなければ！ みんな
に見つかったら大騒ぎになるに違いない

那緒くんを起こさないように毛布を剥ぎ取って起き上がろうとする。
この時急ぎすぎたのがあだになった

ーガバッ

すると那緒くんは起きようとする私のパジャマの袖を掴み布団に
引きずり込む

私は引つ張られ那緒くんを潰してしまつのを防ぐため地面を両手で抑える

さっきの状態は添い寝程度で今度のは押し倒したような感じになつてしまった

「ムニヤムニヤ…なのはちゃんもう、無理だよ」

那緒くんの顔が急にだらけた顔になつて涎よだれを垂らしてる

キヤー、本当にまずいよ。まだ誰もいないのがせめてもの救いだよ
てか、那緒くんどんな夢見てるのー

「…なのは、ついにあんた……」

戸の音は聞こえなかったからここにはいないで私と那緒くんだけだと思つてたからまさか

「あ、アリサちゃんいつから…」

まさかアリサちゃんがいるなんて思つてもみなかたつたよー！！

「ついさっきよ。ごめんなのはさすがに無いわよ」

すごい軽蔑な目で私を見てる。案外アリサちゃんは思い込みが私たちよりも激しいから今の状況を私が悪く思つてる方に勘違いしてるに違いない

「なのはもう、友達ではいられないようね…」

私が待つてと言おうとしたらアリサちゃんの顔から泣き真似？

あれ、ほっぺに伝う一筋の光が…相当シヨックだったらしい。早く誤解を解こうと言葉を噛みながら発する

「ち、違つよアリサちゃん！ こ、これは、その…」

「もういいわ、那緒だつて「もうなのはちゃん…だめ」っていつてたから」

「いや〜！ 最初にムニヤムニヤ言つてたからね！ あれは寝言で何もなかったの！！」

「でも！ なのはは那緒のこと…その押し倒してるじゃない。今からなのはが那緒を襲おうつてことでしょ！」

「ちつがあ〜う！！ それも何故か起きたら那緒くんが隣で寝てて起きようとしたら那緒くんが引つ張つてこういう状況になつちやつただけだよ」

「なのはわかつたわ。今まで疑つてごめんなさいね」

「アリサちゃん…うん。分かってくれたなら平気だよ」

話せば何でも解決つて訳じゃないけど、このぐらい親友ならすぐに解決できるに決まつてる

そつだよアリサちゃんとは小2の時から友達なんだもん。こんな些細な事ささいで親友の絆に溝が出来るわけがない！

今日は窓を見たけど良い天気だしみんなで出かけられたら良いな。と思い那緒くんを起こさないようにアリサちゃんの側まで行く

「でもね、なのは…」

アリサちゃんは呆れたような顔で続ける

「それは自分の布団で言うときだけに弁解を許されるのよ」

アリサちゃんは優しい顔に代わり口は笑ってるけど全く目が笑っていない

私はギギとホラー映画みたいな感じで後ろを振り向く
乱れた布団、きれいに置かれたレイジングハート。と言うことは言わなくてもわかるね。あえて言わないよ、挫けそうだから

「どうして〜!!」

今日一番大きな声がアリサちゃんの家で聞こえたと後でフェイトちゃんに教えてもらった

おはようございます。さっき絶叫したなのはです。今日もそういう騒がしい日になりそうです

このままアリサちゃんの中では記憶のない好きな人の寝込みを襲う変態さんになってしまったのだろうか…

後で聞いてみよう

私はアリサちゃんとみんながいるリビングに移動して今はやてちゃんと合流した

「なっはっはっは、なのはちゃんも難儀なこったな〜」

「もう、本当だよ！ 私そんなに寝相悪くないのに那緒くんの布団の中で寝てたんだもん。アリサちゃんが勘違いするのが悪いの！」

「なんでなのはが逆ギレすんのよ！」

はやてちゃんは苦笑いしてアリサちゃんはまだブンブンしてる
するとすずかちゃんがこっちにきた

「朝ご飯出来たみたいだよ」

朝から大きな声を出してしまったから、お腹が空いちやったみんな
で食べるため食堂と言っても良いような大きな机のある部屋に向かう
向かうと言ってもすぐ隣なんだけどね。そう言えば那緒くんを起こ
さなきゃ

「おはよう……」

行こうと思ったらドアをゆっくり開け空いている手で目を擦りなが
ら眠そうな顔で起きてきた
この場にいるみんなで笑顔でおはようって返す

「あら、那緒くんを自分で起きたんか偉いな」

「うん、はやておねえちゃんの笑い声で目が覚めたんだ」

那緒くんの周りからパア〜と明るくなった顔で笑った

「なのはちゃん！ 那緒くんかわええなあ」

こつちを振り向き子犬を見たような小さい者を愛^めでるような声で言った

そしてまた那緒くんの方を向き優しく那緒くんの頭をナデナデし始める。む、はよてちゃんずるい！ アリサちゃんもそういったような顔ではよてちゃんと那緒くんをみてる

「おはよう那緒くん」

「おはよう！　なのはちゃん」

少し遅れて私も那緒くんにあいさつする

「むう、なんでなのはだけちゃん付けなのよ…」

アリサちゃんが聞こえないぐらいの声で言ったから気になったけど、とりあえず那緒くんとの話を再会する

「今日はよく寝れたかな？」

「うん！　なんか隣が暖かくて気持ちよかったよ」

「うっ、そうだったんだね」

「もうね、お腹空いちゃったな」

「そろそろ行こうか那緒くん」

「そうね、みんな待たせてるし」

みんなが待っていた。謝ったらみんな許してもらった

今日のご飯はトースト、目玉焼きに牛乳と言った普通の朝食だけど私みたいな庶民がそう手が出せるようなお金ではない

「いただきますっ」

「良くできました。それじゃいただきますよ」

「アリサちゃんって那緒さんに優しいよね」

「そ、そんなことないわよ！」

すずかちゃんの言葉でガタンと音を立てて否定する。そのアリサちゃんの顔はほんのり赤みを帯びている

「アリサちゃん、子供苦手そうなんだけどな」

「私は那緒だから平気なの」

「ん？　なんか言ったアリサちゃん？」

「何でもない！」

私はアリサちゃんたちのやりとりを見るのは止め次は那緒くんを気に入ったはやてちゃんたちのやりとりを見してみる

「おいしいねはやておねえちゃん、榎奈おねえちゃん」

「そうやね〜。みんなで食べるから尚更なおさらやな」

「そうだね。私こんなに大勢で食べるの初めてだよ」

こっちはこっちで盛り上がってるみたい。話に乗り遅れてしまったから必然的に一人で寂しく食べてる

話そうとすれば出来るけどご飯が…おいしすぎる。太っちゃうよーやだなと思いつながらも勝手にトーストを口に運んでしまう

するといつもはクールとかいろいろな顔を持つ持ち主で学校の同じクラスの女の子がかっこいいと言う大河くんが那緒くんとはまた違った整った顔と声変わりがし終わった声が私の耳に入ってきた

「なのはは君野那緒のことが好きなのか？」

「えっ！？ どうしたの急に」

いきなりで驚いた。普通に当てられた…もしかしてバレバレなのかな？ これでも、意識し始めてずっと隠してきたのに

大河くんはいつもこんなことを聞いてきたことなんて一度もなかった私たちみんなにやさしくて、何故か那緒くんには厳しいけど…今はさすがに気を使ってるらしいけど、那緒くんに話を振られるときこちない態度そそくさ話し終え去ってしまう

大河くんの優しさや照れるのや私たちの深いことまで詮索せんさくしないのがまたフェイトちゃんやはやてちゃんが好きになったところだと思う。けどどこか私たちとは一歩後に付いてくるように感じる

「いや、別にただ少し気になったただだから。気に障ったんだったらごめん」

「ううん。少し驚いただけだったから平気だよ。それと好きだよ那緒くんのこと」

素直に教えたのは友達というのと、気にかけてくれて嬉しかったからなんだけどね

「そうか、教えてくれてありがとうなのは」

「いえいえ、こちらこそ気にかけてくれてありがとうね。あ、それと大丈夫お腹？」

「腹がどうしたんだ？」

「もう、好きな人に蹴られた場所だよ。お話ししようと思ったけど、よくあるよね好きな子にかまってほしいときなわざとちょっかい出すのとか」

私はニヤニヤしながらいつもとは逆に攻めに入ることが出来た、ちょっと嬉しいかな

「なっ！？ いつからそのことを知ったんだよ！」

荒い声でダンと机を叩いた。みんなこっちの視線を感じる特にフェイトちゃんとはやてちゃんの視線が痛い…

「まあ、それはそのうち話すとしてどう？ 順調かな」

「なんというか、俺を向いてくれないかな。あいつの方ばかり向いて」

みんなは何にもなかったよう無かったようにそれぞれ話を戻す大河くんははやてちゃんと榎奈ちゃんと話してる子の方を見る。そ

してその子をちらちら見るアリサちゃんも見る

枯れた声で笑ったが今にも心が折れてしまいそう

辛く、何にも出来ない自分にイラつき、その気持ちに気付いてくれない好きな人に歯痒い^{はがゆ}気持ちなんだと後から付け足した

私も解る。初めて那緒くんと同じクラスになってすごく嬉しかったけど、私のこと忘れたのだと思いシヨックで諦めようとした時また那緒くんと話すことが出来てまた友達になれて同じクラスになったときよりも嬉しかった

でも、前みたいには呼んでくれなくて離れてしまった感じがした

そして、榎奈ちゃんを好きになっていて、アリサちゃんとも仲が良はどうしようもないなって思うしかなかった

「なのはおも大体俺と同じなんだな」

「にやはは、そうだね。しかも卒業したら会えなくなっちゃうしね」

「あゝ、そうだね。仕事だからしょうがないよな」

私たちは溜め息を吐いて現実を見せられたことに落胆

話が終わった後に那緒くんたちを見たら何かを企んでるような顔をしていた

勉強しませんでした。前編（後書き）

感想などありましたら気軽に書いてもらえるとうれしいです

はやての関西弁が出来てるか分かりませんよ…

次回は少し大河がハッチャけます

勉強しませんでした。後編（前書き）

十五話です

すみません。前後にしまつてので早く投稿しようと思つてたの
に出来なくて

もうそろそろクリスマスですよ

その日は塾休みなんでイベントやろうかなんて思ってます。リア
充な人は読めないかもしれませんがね

イベントやろうかな。今は考え中なんですけど、今考えてるのは
二日間で三回連続投稿！！ってな感じです

皆様なんかいい案ありましたら感想の一言に書いて頂けたら嬉しい
なってます

では、どうぞ

勉強しませんでした。後編

『えー』

私と大河くん以外の驚きの声が部屋に響いた。私たちは声の発信源まで行ってみるとはやてちゃんと那緒くんが楽しそうに笑ってた。榎奈ちゃんはその緒くんの隣で苦笑

「はやてもう一回言って」

「せやから、かくれんぼやりたいつて言ってるやろ」

アリサちゃんの質問にはやてちゃんは人の話聞してるのかみたいな顔で返した

「勉強はどうすんのよ」

「アリサちゃんは堅いな。今はそんなことやってる場合ちゃうやろ」

はやてちゃんの目線が那緒くんの方に向く。自然とみんなの視線が那緒くんの方に向く。那緒くんは？が頭の上に乗っかって首を傾げてる

「わかったやろ」

「でも……」

最初の強気の声から一転、気持ちはわかったけどテスト前に遊ぶというのはどうだろうと思ひ反対したいのだろう

私は普通にテスト期間中も遊んでて前日にアリサちゃんたちにすがりついてるな。情けないよ

「アリサおねえちゃんはかくれんぼしないの？」

「うう、わかったわよ！」

那緒くんの上目涙目の武器を使いアリサちゃんノックアウト

大河くんは好きな人を知ってるから明らかにいやそうな顔をしていたうん、嫉妬だね。わかるよ私も那緒くんにあれをされてみたいのからね

「やったな。これで遊べるね那緒くん」

「良かったね那緒くん」

「うん！　かくれんぼだー」

3人で交互にハイタッチをする

私、アリサちゃん、大河くんは釈然としない思いで三人を見守ってた

フィールドはアリサ家全体を使いたいとのことだったが、アリサちゃんやすずかちゃんがかくれんぼにそれは広すぎること、榎奈ちゃんによる提案で那緒くんが迷子になるから室内でやろうとなった

「じゃ、ルール説明な」

私と那緒くんがテレビを見ていた所ではやてちゃんたちによるルール説明が決まったようだ

ルールを決めてたのはこの家の主のアリサちゃんに一番人のことを考えてると思うすずかちゃんだ。

ルールの内容は

- ・家から出ては行けない（庭も不可）
- ・初めに見つかった人が次の鬼となる
- ・開始から1時間以内で残り一人でも見つからない場合鬼の負け、三回連続で鬼だった時最初に見つかった人が鬼となる
- ・危険と思うところには行かない
- ・何かあった場合、解決次第で再開する
- ・那緒は誰かしら付き添いが必要だそうだ。まだいくつか細かいルールはあったけど特に出すような物はないかな

「誰か質問ある人はいるかしら」

アリサちゃんが最後の確認をする

「はい、アリサ。那緒の付き添いだけど、どうやって決めるの？」

「最初は鬼決めジャンケンで鬼の前の人が付き添い。二回目以降は最初に見つけた人が那緒の付き添い」

アリスちゃんはこれで良い？　と言って質問をしたフェイトちゃんに聞く

「うん、ありがとう」

「じゃ、そろそろやるっか」

すずかちゃんの合図でみんながジャンケンの構えをする

『ジャンケン、ポン』

ジャンケンの結果、私とはやてちゃん、フェイトちゃん、すずかちゃん、榎奈ちゃん、那緒くんが一発でグーで勝ちアリスちゃんと大河くんだけとなった

「くっ、何故チヨキを出してしまったんだ。次は負けなければ」

「どうして負けようとするのよ！」

「良いからやるぞ、ジャンケンポイ」

「わ、わっ」

アリスちゃんが慌てて早く言った大河くんに合わせてジャンケンをする。大河くんはすごく楽しそうな顔をしている

パー ↑アリサちゃん

チヨキと見せかけてグー ↑大河くん

「あんた後出ししたでしょ」

「してないよ。それより負けた俺が鬼な」

バレバレな後出しでしらを切る大河くんだがアリサちゃんは見逃さなかった

「大河おにいちちゃん後出しした」

純粹無垢な那緒くんはこういうことをアリサちゃんと同じ様に言いはやてちゃん曰わく那緒くんがルールらしい
「くっ、那緒め」

「いいからやるわよ、ジャンケンポイ」

グー ↑アリサちゃん

チヨキ ↑大河くん

「よっしゃやややや！」

ガッツポーズをしながらあまり出さない大声で周りを引かせる

「ははは、よかったね大河くん」

「いつもの大河はどこに」

「大河おにいちちゃんは鬼好きなんだね」

「那緒くんはこのままでいたね」

「うんっ」

今私はアリサちゃんの部屋らしき場所に来ている。猫のぬいぐるみからライオンのぬいぐるみまでいっぱいベッドや机の上に規則的に並べてある

そして、クローゼットに隠れさせてもらうことにした。入ったときアリサちゃんの良い匂いがしたのはしょうがないと思う

- ガチャ

「アリサおねえちゃんここに隠れようよ」

「私の部屋ね、いいわよ」

クローゼットの隙間からのぞいてみると、アリサちゃんは那緒くんとちゃっかり手なんか握っていた
後でみんなにいつてあげよう

「ここにしよう」

「ベッドのところね」

アリサちゃんは誰かに報告してるのだろうか…

そういえば、アリサちゃんは一人っ子で子供の相手苦手そうに見えるのに扱いがうまい

これも那緒くんの顔と性格が可愛いからなのかな。ああそうか、ぬいぐるみもそうだけど可愛い物には目がないんだ

前の那緒くんには少しトゲトゲした態度で接してるけど今の那緒くんには私たち以上に優しく接してあげてる

前にアリサちゃんの携帯を見てみたら可愛いストラップだったからつい写メってしまった

そんなことを考えていたら誰かが入ってきた

「あつ、榎奈おねえちゃんだ」

「那緒くん。アリサちゃんもいるね。ここ良いかな」

「もちろん良いわよ」

那緒くんたちが見えないけどなんとか声で聞き取ることが出来る
とっても楽しそうだな

「ふにゃ」

「誰の声？」

「…ごめん私」

「可愛い声だね。どうしたの？」

「わからない。急に何かが私を…」

かわいいう可愛いよアリサちゃん、私キュン死するところだったよ。
やった人ありがとね

「ひやや、何？」

なにになに？ 次は榎奈ちゃんや、バイ。キュン死しちゃうよ。と
言うことは那緒くんがやったんだね

『キヤ』

可愛いよ

『あん』

あれ？

『ううん』

まさかね

『だめ』

「何やってんの三人とも！！」

まさかと思って見てみるとアリサちゃんと榎奈ちゃんが那緒くん
指でツンツン突っついていた

- バンッ

「見つけた…って、何この力オス」

「何って言われてもね…」

「あゝあ、見つかった」

那緒くんは残念そうに走り去ってしまった

あれから何回もやってみんな疲れたらしいから早く寝てしまった

勉強しませんでした。 後編（後書き）

一番心配なのがはやての関西弁。それと、違う二次小説読ませてもらいなのはが自分でなのはって言ってるけど、俺が間違ってるのだからうか…

神様がいました。（前書き）

十六話です

なんだかんだで十六話まで行った。中途半端だけどしみじみ思ってきた

皆読んでくれてありがとう！

ちょっと不満もあります。前よりも感想が減りました。°°（
ゝ。°°。ワーン！！ □

では、どうぞ

神様がいました。

「うつ…」

頭痛しながらも何とか起き上がり、周りを見渡す

頭痛いなあ、てかここどこだし！

あれ、でもここ見覚えのある部屋？　だな

周りの壁は白を基調としたもので、ひときは目立つスポーツが一つ張ってある

あまり動かない手で下を撫でるように触るとさらさらした感触と弾力のあるベッドだった

この部屋はまさしく

「俺の部屋だー」

まさかね…。夢でも見てるんだよ

割と本気で自分のほっぺを抓ってみる那緒です

「いたっ！！　夢じゃないだと」

「君は一人でコント出来るんだ」

「まっね、このぐらい普通だと思うよ」

どやった顔でイラつくように言う

「そうなんだ。今邪魔しないで良いところだから」

「え、何その放置プレイ！？　って、俺誰に話してんだし！！」

「あ、僕？　神だけど、君が僕を全否定したけどね」

「神様なのか…二時小説みたいに自称ってことですね。わかります」

この見た目がねえ」

全身黒のジャージで背中に大きくPAMAのイラストが張っている。顔はテレビに向かっていて、ため見えないが、髪は黒で寝癖が爆発している

これだけみると髪の短いユーナだな

「残念ながらそんな面白く無いんだよ現実はなあ」

ハァーと嘆息しながらピコピコとゲームを進めている

「そうなんですか。こっちは面白いですよ」今は修羅場ですがね」

正直ここにいて助かった。あそこにいたらなのは言葉は男なら誰でも好きな人がいても揺らいでたに違いまい

「君も大変だね」

「はい。神様は何が理由ですか？」

「仕事」

「はい？」

「だから仕事ができるくて今サボり中」

神様ーあんた俺よりマシじゃないか！

「そういえば神様。何のゲームしてんですかー」

聞いたことのあるボイス、女の子がキャツキヤと聞こえてくる。まだベッドから起き上がったままの俺は神様で画面が見えない

「このゲーム？ ここにあつた物なんだけどねなかなか面白いよ」

「もしかしてクラシス？」

クラシスとは大乱闘クラッスユシスターズの略のことである。俺からしてみればあれは大傑作だと思う

この話はまた次の機会があつたら話そう

「おお、そうだよ。話が変わるけど君にこっちに来てもらったのは他でもない」

神様一拍置き真剣な口調になりこっちを向いた。その顔は大人びた顔立ちで寝癖があるのが勿体ないぐらいカッコいい

「一つは高町さんとのハプニング遭つたじゃん。それ僕の所為だわ」

ごめんごめんと笑いながら謝ってきた

「神様俺に殴りたいの!？」

その後神様になだめられしうがなく許し理由を聞くと暇だったとのこと

一発殴ってやったのは言うまでもない

「ぐう……なかなかの拳だね。もう一つは君のことだよ」

「俺のこと？」

神様はゲームの電源とテレビを消しまた振り向いた

「そう、覚えてないだろうが君の転生時についてのこと。願いは4つ、まとめれば3つかな」

「俺はそんなに欲張ったのか」

「少ない方だよ君は。一つ目は君の通つてゐる学校を共学にするのと
まつしやう
 転生した時の記憶の抹消

二つ目は魔力だね

正直言らなくなったんじゃない？ 君の要望は俺 T U E E E E E に
はなりたくないって言って高町さんと同じくらいにしました
三つ目はデバイスのハイスペック化だね

君のデバイスはすごいよ。なんと言っても自主的・独創的・感情的が普通の人間と変わらないからね
少し長くなったけどこんなものかな」

かなり欲張ったな俺…。まあユーナの事だけは良いとして他が可笑しすぎる。なのはたちと恋愛したいからって学校の共学って

「あ、そうだ。まだ言ってないことがあった。君の特典いらないものあるじゃないか」

「うん、どうしようもないぐらいに」

「そこでだ、君には等価交換なら何でも叶えてあげよう」

等価交換ってハガレン（鋼の錬金魔術師）の等価交換？

「そんなことして良いんですか？」

よく話が聞けるように俺はベッドから降りて神様の前に座る

「神様だからね。それと自分に対してのそれ相当の物じゃなきゃ駄目だからね」

神様は笑いながら取り扱いに注意と言った

「なるほど、了解しました神様」

「よし話は終わったことだしクラススでもやらないかい」

「やる！ クラススやる」

神様はテレビとゲームの電源を付け一つは自分にコントローラーを持ちもう一つは俺に投げた。神様の隣に画面が見えやすい位置に座る

やったね。クラススだよ！ 話す機会が出来たので満遍なく話そう

と思う

クラスとはさっきも言った通り大乱闘クラスユシスターズの略でメインキャラからサブキャラまで全てが美女なのだ

残念なことになったのはたちの世界にはなかったのだ。ゲーム機本体はあるくせに…

探しまくったG A OとかB O O K O Nとかにも行っただ

ゲームの内容は大乱闘とはタイトルで書いてあるもののあれは大運動会だと思う。ムフフじゃないのは少し残念だけど、障害物競争の宇宙バージョンとか自分が作るステージでドッジボールをするなんてゲームだ

俺は神様に呼ばれるまで思考の渦にはまっていた

体内時計では大体3時間ぐらいはずっとやっていたに違いない

お腹も空いてきた

「ふー勝った勝った。ごめんね神様」

上機嫌な声であるのは丸わかりでコントローラーを置き固まった体をポキポキと鳴らし寝っ転がる

「ま、負けた…。しかも全敗…だと…」

自分の弱さに絶望する神様

「勝ったことだしそろそろ帰りたいんですけどー。みんなに迷惑かけてるだろうし」

「全敗…。はっ、そうだね。負けたのは次回勝つとしようかな」

「次回は無いだろー」

俺と神様は笑いながら俺の周りが光輝く

俺はもうなのはたちの世界、いや俺たちの世界に戻るのだろうと悟りおとなしくする

「今回はありがとう、そしてすまなかったよ。こんなに楽しかったのは久しぶりだよ」

「こっちも楽しかった」

「お礼と言っては何だがこれを貰って欲しい」

神様が俺に手渡したのは模様もないシンプルな銀色をしたブレスレット

もうこれは俺にとって宝物だ。神様と友達と言うのは変かもしれない

いが俺にとって神様は友達だと思う

すぐに右手にはめる

「ありがとね。じゃ、 “また” 今度」

「ああ、 “また” ね那緒」

すべての空間が光り出し神様と元俺の部屋が眩しくなり段々と意識が遠のいていった

「（かみさいど）」

今日は楽しかった。全敗って悔しいが仕事サボった甲斐があったってもんだな

「あつ、那緒に使い方言うの忘れた。まあ、使うときに言えばいいかそれと高町さんのハプニングは記憶から無くしてあげよう。那緒のだけ、だけどね」

そろそろ戻らないとユイちゃんに怒られちゃうな。怖くないけど

立ち上がり天界に向けて指を鳴らしゲートが出る
それに乗ると自動で上っていく

一人でいる寂しさがあつたが那緒のおかげで取れたな。今は一人だ
けどユイちゃんでも弄^{いじ}ろう

僕はそんな楽しいことを考えながら天界に戻っていったのだ

神様がいました。（後書き）

書くこともないのでこれで十六話終わりです。

次回は那緒が戻ってきます。少々ご都合主義になってます
大したもんでもないんですがね

記憶が戻りました。（前書き）

17話です

この回で記憶は戻ります。長かったなぐだぐだしてて申し訳ありませんでした

いろいろ新しく導入してますが気にしないでください

それと地の文増やしてみました

たまにごっちゃしてるところもあると思いますが感想等をお願いします

では、どうぞ

記憶が戻りました。

「（なのはさいど）」

今日は日曜日、さすがに勉強をしないと不味いから那緒くんには室内で遊んでもらって私たちは昨日の分までやる勢いで朝から勉強しています

初めてから2時間私とはやてちゃんは限界で机に伏せフェイトちゃんは国語で苦戦中

休憩するために私は机から顔を上げお茶をみんなの分まで注いで配っているのはです

みんなの分まで配り終え元の場所に座ろうとしたら那緒くんが私の席に座っていた。右隣はアリサちゃんでアリサちゃんの右隣がはやてちゃんが座っている。アリサちゃんの対面にはフェイトちゃんが那緒くんとはやてちゃんに遊ばれてる

むう、那緒くんの隣がくずるいい

今回は違う席に座ろうかな

周りを見てすずかちゃんの隣の席が空いていることを思い出す
私は自分のお茶を持ちすずかちゃんの隣に座る

「すずかちゃんここ座るね」

「うん。どうぞ」

そういえばすずかちゃんの好きな人聞いたことないな。私が言えることじゃ無いけど言ってくればいいのになあ

「なのはちゃんはあっち混ざらなくても良いの？」

「混ざろっかなって思ったんだけど席が空いて無くって」

私とすずかちゃんは自然と楽しそうに遊んでる那緒くんたちを見る

「そうなんだ。残念だったね」

まるで自分のことのように悲しむすずかちゃん
そして一拍置いた後すずかちゃんは口を開く

「那緒くん何時治るかな…」

話の中心人物の那緒くんの現在の状況にすずかちゃんはさっきと同じ様に悲しそうな顔になる

「うん…。早く治ると良いね」

すずかちゃんの影響か私も声のトーンが小さくなってしまった

「そっだ！」

すずかちゃんは何か閃いたのか手を叩きパーと明るくなって那緒くんたちから私の方に視点を変えた

どうしたんだろ？ でもすっごくやな予感しかないんですけど

「なのはちゃん！ 絵本とかにあるお姫様が呪われて眠っている王子様に目覚めのキスをするのはどうかな」

すずかちゃんはキスの部分を強調しながら言う

ファンタチックすずかちゃんめ何てこと言うのー

「きききき、キ、キス！？ まだ出来ないよ」

慌てる私に対してすずかちゃんはニヤニヤしながら楽しんでいる

那緒くんとキス。まだ早いよね。お父さんとお兄ちゃんは18歳になるまではしちやいけないって言われたし

でも、これで那緒くんが治ったら喜んでするんだけど…
って、何私はやる前提で考えてるの

那緒くんは榎奈ちゃんが好きで

思考の渦の中、すずかちゃんはやれやれとした顔で暴走した私を止めてくれた

「なのはちゃんテンパリすぎだよ」

すずかちゃん笑って私のことを苛める

「すずかちゃんが悪いんでしょ」

「なのはちゃんまだだよ。那緒くんとキスは」

「にゃ、何言ってるのすずかちゃん！ そんなこと言っていないよ」

「言つたよなのはちゃん」

それは…言つたかもしれないけど掘り返さなくてもいいのに

私は涙目になつてしまふ。それでもすずかちゃんはわハハツと笑つてゐる

「すずかちゃんの意地悪う…」

「ごめんねなのはちゃん。恋してる乙女が可愛くつて。それと友達
の好きな人知つてたらちよっかい出したくならない？」

「ううっ、それは…ちよつとは……あるかも」

でしょ。と言いすずかちゃんはお茶を啜る^{すす}

こんだけやられたんだ。少しくらいは聞きたいこと聞いて良いよね

「すずかちゃんって好きな人いないの」

「ぶー、ちよつとなのはちゃんいきなりずるくない？」

すずかちゃんは油断していたようで女の子としてしない方が良
いお茶を吐いてしまった

机の上にあつた台布巾で丁寧に吐いた所を拭く

「でも気になつたんだし良いの」

私はウインクをしてアニメだったらキラッと可愛くなつてい
たに違いない

「可愛く言っても駄目だよなのはちゃん。お茶吐いちゃったよ」

「すずかちゃんを苛めたくては言ったわけじゃないんだからねっ！」

「アリサちゃんの真似しても駄目だからね。可愛いけど……」

すずかちゃんはなのはちゃんがやると新鮮だねと言っていた
ツンデレ!!アリサちゃんはすずかちゃんの中では確定のようだ。
後で言ってみようかなと思ったのは内緒なの

「じゃ、次は「なのは、那緒知らない？」にや、にやに？」

「にやにじゃないわよ」

突然現れたアリサちゃんに驚いた私を呆れてる。すずかちゃんは二
コニコして見てるけど、全部アリサちゃんの所為なのはかけ確実なの
「それよりアリサちゃん。那緒くんがどうしたの？ 一緒に遊んで
たよね」

「そうだよ。楽しそうだったの」

『私たちを置き去りにしてね!』

打ち合わせ無くてもハモるとはさすが私たちが以心伝心、心が繋がっ
てるね。アリサちゃんの可愛いテンパリ具合が今ここに！

「うっ、それは那緒が見つかり次第謝るから」

とぶつぶつ言っていていじけてるアリサちゃん。目には涙を浮かべず

かちゃんに頭をよしよしされてる

私がアリサちゃんを苛めたみたいになってるよね!?

「って、那緒くんがどうしたの!？」

うかつだった。すずかちゃんと話に夢中だった所為か那緒くんから目を離してしまった

「あつ、そうだったなのは。トイレ行ってくて言って一人で言っちゃったのよ」

「まあ、それはどうしようもないし、しょうがないんじゃないの？」

「それがまだトイレとか」

「それが那緒が行ってからもう20分も経ってるのよ」

上からアリサちゃん、私、すずかちゃん、アリサちゃんと話している話の流れはますますいやな方向かかってしまってる

私とすずかちゃんが20分も話していたようだ

「これは迷子だ早く探しに行こう!」

「ちょっと待ちなさいなのは。私も行くわ! すずかは先に探しに行っただよとフェイトにこの私たちのこと伝えに行つて!」

私が急いで探しに行こうとする中アリサちゃんは適切な指示で物事を運んで行く

すずかちゃんはわかったと言って先に出て行った

「じゃ行くわよなのは」

これがリーダーシップなのかと感心して気持ちを切り替え那緒くんを探すことに集中する

「うん」

無事でいてね那緒くん。私が絶対見つけるからね！

？

「「なおいど」」

まばゆい光が俺を包み込んだと思ったらそこで意識が遠のいてしまった

時差ぼけみたいに頭が痛い。起きて辺りを見回してたら苔で滑って川の中。全身ずぶ濡れ状態の那緒です

「って、ここどこだしっ！」

つい思ったことが出てしまった。一人つつこみとは恥ずかしいと、ここで大切なのが状況確認だよね

まず、神様とゲームしていた。少し2人でのめり込み過ぎた気がするが気にしない

別に久しぶりのクラシスをやらなきゃ損だなんて微塵^{みじん}も思ってたんじゃない。よくよく考えればクラシス持ってくれば良かった

話が脱線した。そして光が包み込んだ後こっちに帰ってきたと帰ってきたまでは良かったけど苔踏んであゝれゝとなってわあゝゝとなって川の中にざっぶゝんとなったとさお終い。うん、不幸だーって誰でも叫びたくなるよね

今思ったんだが何でこんなところいるんだろ？ 確かアリサン家に勉強しに来て何か誰かにやらかして大事な話をしていたはず何だけど…

あれ？ 誰と何話してたんだ？ 思い出せない。まあ、いつか思い出すだろう

いつまでも川の中にも何も始まらないと思い川から岸に上がり、乾かすために上半身だけ服を脱ぐ

服を脱いだ身体には中肉中背が合ってる体つきだ

中学生が何も部活動や習い事をやってないだけに肌は白く女でも羨むぐらいの艶やかで綺麗

クラスメートに男の娘とか女の子に間違われても仕方ない

ラッキーなことにポケットに入った魚を入手！ お腹空いてたんだよね

何時の日かユーナと一緒に見たサバイバル方法の特番を思い出し半信半疑になって試したところ出来てびっくり

「まさか本当に出来るとは…」

しばらく感動して呆けてた所為で火が消えかけたので慌てて良く燃える枯れたクヌギを投下する

適当に入れたため水分を含めたものでもあつたのか異様に煙が立ち上る

「うわっ、煙たい」

煙たいのを我慢しつつ入手した魚に感謝を込めて皮を剥いだ枝で魚の口から刺していく。刺し終えたら地面に持つ方の枝でちょうど良い場所に地面に刺す

不意にここはどこだろと思いつ返しあたりを見渡す

鬱蒼したジャングルのように深々とした見たこともない木もある
ジャングルに住んであろう鳥の鳴き声

もう良いだろう、そろそろ焼けたな。一口食べるうん、まだ生焼けでした

上空から風を切る音が聞こえた

前にテレビでやってたのを思い出す。鷺が鳶が獲物を狙って滑空するってのを
こうしてはいられない

急いで火を消し魚をくわえ取り敢えず適当な方向に走る

「確かこの辺に煙が…」

「降りてみましょう」

なんか聞き覚えのあるような声が…

気になって立ち止まると足の下はさつき踏んだ苔だった

だが、不幸少年じゃない俺は転ぶはずもなく無事みんなの所に生還するはず…ではなくてまだ乾ききつてない靴に絞るのを忘れたズボン、あるものが力を倍増させる

そう苔だった！　そしてまた川の方に転んでいくのでした

？

「（なのはさいど）」

「確かこの辺に煙があつたような」

「降りてみましょう」

アリサちゃんの言う通りに降りる。何故降りるかって言うと今私が魔法を使っているの

アリサちゃんは残念ながらリンカーコアを所持してなくて魔法は使えないから私がアリサちゃんを抱え飛んでたというわけ

どさくさに紛れてアリサちゃんをお姫様抱っこをしている。でも、着地してアリサちゃんが私の腕から降りた

ああ、ちよつぴりさびしいの…

仕方ないと思いながら辺りを見回す。すると、急いで消したらしい火の後、それにこの服は…

『那緒（くん）のだ！！』

アリサちゃんも思ったのか2人して那緒くんの服を指差している

「なのは！　那緒がここに来てたみたいね」

「そうだねアリサちゃん！　早く探しに行かなくちゃ！」

・ざっぶぐん

『！！？』

水に飛び込むような音が聞こえた。もしかしたら那緒くんかもしれない！

「行ってみようアリサちゃん！」

アリサちゃんの有無を聞かずに聞こえた方に向かって走る

「待ちなさいなのは！　そっちは駄目！！」

私は少し後悔した。ここはアリサちゃんの敷地内だ。アリサちゃんの言うことを聞いとけばあんな事にならなかったのに…

アリサちゃんは走った私の腕を掴み引き止める。止まった私の

足の下は濡れた苔だった

そんなまさかね…。転ぶはず無いよね…

滑って態勢を崩した私はとっさに引き止めたアリサちゃんの腕を掴み返した

「きゃ」

「ちょ、なのは!?!」

そして、私はアリサちゃんを巻き添えにして川の方にダイブする羽目になったのでした

「なのはのバカー」

「いめ〜ん」

?

「〔なおさいど〕」

「あの苔めえなんたる力。これだから苔は…」

はい、まして水の中
すぐにあがり誰もいない虚空に愚痴ってます

場所は運悪く流され行き着いた。もうジャングル（仮）とかではなく水流も穏やかで水切りが出来るほどだ。今いる岸は3センチくらいの石が転がっておりその辺には漂流した枝があった
暇つぶしに釣り竿を作ってみた。作ってた方が面白かったのは暗黙のルールだ

余談だけど、あの生焼け魚流れたよ…
俺の頑張りも空しく流されちまった悲しみに…

食べれなかったのだからコイでもコイの王様でも良いから釣れて欲しいもんだ

気が緩んだ途端に枝にくくりつけたつたが張った

これは大物だ！ 力を一気に入れるはずもなく、どうせ濡れてんだし入っても変わらない
ざぶざぶと川の中に入っていく何が釣れるかな、何が釣れるかなタララ、タララ、タラララッ

なんと、白き悪魔こと高町なのはと、ツンデレじゃ負けねえアリサ・バニングスでした

「ほりゅう。またはリリース」

しようとしたが、自然災害になりかねん！

2人の側まで行って優しく引き寄せる

「っ!!」

見えてしまった…

濡れた服が透けて中学生にしては2人とも豊かな膨らみ。それを包むものも

反射的に目を逸らす。見ないように抱える。女の子のプニプニした肌が服を通して伝わってきた

理性があ、俺の理性があゝ。女はずるい、無意識のうちに男をドキドキさせてくる。幸いにも2人は気を失ってる

2人を隣に並べる

見てしまったのは不可抗力だからね。特別にその辺にでも記しておこう

「なのは白、アリサ赤」

さっきの釣り竿でガリガリと地面に書いた

思ってたとおりのブラだった

「よし、書いたことだし大きい葉っぱ探しに行くか。ありがとな2人とも」

寝ている2人の顔を見てさっき言った言葉が恥ずかしくなつて岸から離れた茂みの中に入ってしまった

？

「「なのはさいど」」

寒い。でも何故か心がすごく暖かい
何でだろうと思って起き上がる。アリサちゃんが隣に寝ていた

「アリサちゃん起きて！」

アリサちゃんを揺すって起こす

「うつ…。ここは…」

なのは無事だったのね」

「ごめんなのアリサちゃん」

「もういいわよ。2人とも無事だったんだし」

「ありがとうアリサちゃんっ」

多分、言われたのはこの言葉だと思う。勝手な考えだけと言ったときの暖かい気持ちと同じだったから

アリサちゃんは何か作業をしていた。私は何してるのか気にな

つたが取り敢えず周りを見える。そこには釣り竿があった。濡れてるからまだそう時間は経ってないはず。それとこのなのは白、アリサ赤って言うのはどういう意味なんだろう

「アリサちゃん、釣り竿に暗号？ らしきものが、なんだろう」

「これは…はっ！」

作業を終え暗号を見たアリサちゃんは何か分かったらしい

「アリサちゃん！ 何か分かったの？」

「これは下着の色よ」

「え？ 下着の色？

ってなんでアリサちゃんが私の下着の色知ってんの！？」

「一緒に着替えたでしょ！」

「あっ、そうだったの」

「一緒に…着せあいつこだと…」

「なんかすごい聞き違いしてない！？」

「な、お…」

「えっ？」

驚いた風な顔とバサツと二枚の葉っぱが落ちた

？

「（なおさいど）」

「一緒に…着せあいつこだと…」

葉っぱを持ってきた俺は疑った、だがアリサはさっきのように言った

なのはたちは百合だという噂は本当だったのか…

何か言ってたようだが友達の驚きの性癖に動揺を隠せない

呆けていたらなのはとアリサは俺に抱きついた

やっと我に帰った俺だったが、次は理性が飛んでいきそうになった

濡れた服、冷たい身体、涙を流す二人、柔らかい膨らみ色々なことが頭の中に神経を伝って渡ってくる

「な、おうん。すごい心配だったんだよお…

またいなくなっちゃうんじゃないかって…」

「バカ、那緒のバカ、心配させるんじゃないわよ。こんな遠くまで行って…」

帰れなかったらどうするつもりなのよ！」

新たな動揺が駆け巡る。何を言えればいいのか、どうすればいいのかわからない

「ごめん2人とも。勝手にいなくなつてもう離れないよ。2人から、みんなから…」

勝手に口が開いていた。頭より先に心に近い口がみんなの側にずつといたいと

「うん、いて！ 離れないで私たちの側からずっと」
「私の許可無くいなくなつたらただじゃ置かないんだから！」

2人は泣きじゃくる。綺麗な顔がぐちゃぐちゃになるまで、俺も目頭が熱くなった。でも、心はとても暖かい、居心地良い

「なのは、アリサ落ち着いた？」

「うん…」

「ええ…」

「そろそろ離れてくれる？ その色々恥ずかしいし」

2人はやっと今の状況を把握したのか顔を朱に染め一歩後退した

めっちゃはずいんですけど！ 臭さ俺の言葉臭さっ

俺たちは恥ずかしさのあまり別々の方を向く。もう誰も話さない時間が5分は経つたはず

落ちた葉っぱを拾い上げ無言で2人に渡す。？ が浮かぶなのはアリサ

「服濡れてんだし巻けよ」

「あ、そうだね。ありがとう那緒くん」

「見んじや無いわよ…」

よし、2人は巻いたし俺の安全は確保した！

「で、この後どうすんの」

アリサは任せなさいと言わんばかり胸を張る

「それなら大丈夫よ。もう来てるはずだから」

そう言つとアリサの頭上に大きなヘリコプターが現れた

「かつこいい」

「すっ」

なのはと俺はまたお金持ちにの偉大さを思い知らされた

？

無事ヘリコプターでアリサン家のエントランスまで送って貰った

玄関まで歩いていくと俺たち3人以外の人が集まっている
もちろん榎奈さんもだ

「ただいま」

取り敢えず軽い声で言っとく

「お帰り那緒くん」

「な、那緒くん!？」

なんだと……。俺の知らない間に榎奈さんが名前で呼んでるのか分かりません

幸せすぎて死んでしまいそう

恥ずかしさのあまりやってきたはやての方を向いてしまった

「お帰り那緒くん。勝手にどっか行ったら駄目やないか」

はやては俺の頭に手を乗つけてよしよししてる
決して、気持ちいいわけではない

「ぬわゝ。ってなにしてんだし!」

はやての手を振り払う

「わっ、那緒くんが反抗期になってしまった!」

すごいショックだったのか目には涙を浮かべフェイトの方に行ってしまった

少し悪いことしてしまった…

そうこうしてる間にみんなが俺の周りに集まっていた

「もしかして…」

誰が言ったか分からないが俺以外の者が呟いた

『記憶が戻った』

うるさっ、え？ 何が

記憶がどうしたの

全員が声を合わせて言った

「記憶？ なんのことだよアリサ」

「やっぱり戻ってるのね。那緒いつからよ」

「いつっていわれても…」

「そういえばアリサちゃん地面に私たちの下着の色書いてあったよね
あ的那緒くんがやるはずもないし」

「そうね、今ならできるわ！」

「アリサの下着見たのか！」

なんで拳構えて2人が迫ってきてるの？

助けを求めなのは見る。しゃがんで顔が見えない
これじゃ助けてもらえない

・ダッ

最終手段で逃げ出した

「あ、こら待ちなさい！」

「那緒てめえ一発殴らせろ」

色々ツツコミたいけど今はそんな余裕はない

「不幸だあああああ」

不幸少年の気持ちがいさしわかったと思う

記憶が戻りました。(後書き)

次回は新キャラ出るかもしれませんが
その話が終わったらオリキャラ説明会とします

デート？ いえ、買い物しました。（前書き）

18話です

本当に遅れてすみません。

gdgdの意味分からん文が続くと思いますがブランク中の作者を励ましてください。割と本気で！新キャラは出ましたがほんの少しです。次回、本格的に出ますよ。苦労したのが名前でした。カタカナにするか、漢字にするかとか、容姿とか。

後、連続投稿です。ただ単に長かったから分割にするだけなんですけど・・・

では、どうぞ

デート？ いえ、買い物しました。

「やっと、やっと会える……」

今にも消えてしまいそうな声が大きな部屋に壁に跳ね返り木霊する

部屋にいる彼女は一枚の写真を見て泣いている
うれし涙だ

彼女が住んでいる家は洋式の屋敷で生半可の大きさではない。
父親が大手会社の資産家であって現代の何でも屋
7年前に父親と言っても血は繋がっていないが日本を妻を置きざりに飛び出して海外に会社を建て今に上る

妻を置きざりと言っても新婚夫婦と変わらないラブラブだが、
彼女は父親の妻も含め逢いたいと思っていた。そして遂にその願いが果たすときが来たのだ

「今行くから……」

彼女は写真に写ってる同い年ぐらいの少年に先ほどの涙とは違い
晴れ晴れしい笑顔で笑っていた

？

こんちわ那緒です。今急いでます
何故急いでるかというと

以前アリサを家で待たせてしまいその償いで買い物することになりました。さすがに恥ずかしいので同じ様な約束をしたユーナも一緒に行く

女の子は支度が遅いと言われてるけどもそんなこと無いと思う。だってユーナは俺が起きたときから準備万端だった

ユーナは急いで支度してる俺とは違い呑気に朝の星座ランキングを見ていた

「那緒〜一位だって良かったね」

ユーナに言われテレビを横目で見る

俺は占いとか信じる方だけど信じない人でも自分にいい事ありますよなんて書かれたら少なからず気になりはするんじゃないかなんて思う

ユーナの言っていた通り俺は自分の誕生日の星座がテレビ画面の一番上にあった

え〜と何々、不良に絡まれてる子を助ける。

何それ、この星座が誕生日の人何のメリット無いじゃん

「ドンマイだ〜明日があるさ〜」

ユーナはそれを告げ先に外に出てしまった。ドアの音で我に帰りユーナの後を追った

俺は気付かなかった机の上に置いてある一枚の置き手紙を

？

「〔ありささいど〕」

那緒の記憶が戻って一週間後学校のテストがあった

今回はいつもより勉強が出来なかったからあまり期待できない
お父様に怒られちゃうかな…

テストが終わって一週間たった後急に那緒がこの前の約束と言って
日曜日の今日デートをする事になった

大丈夫かな…私の服変じゃないよね？

大丈夫よアリサ・バニングス！ 土曜日にすずかのコーチングも
あったもん

私は目の前にある反射する窓で服のチェックをする。複数の誰
かから見られてる気がするけど気にしない。今のドキドキを存分に

味わいたいから

「それにしても、遅い！」

何やってんのよ！ この私を待たせるつもり！

30分よ！ 30分！

しかも二回もよ。まだ一回目よりかはマシだけどレディを待たせるとか最低よ

だいたいいつも人に迷惑かけたり、人で遊んだりまともじゃないのよ那緒わ！

あの日の那緒は誰よりもかっこよかったのに……
また見たいな……

？

「「なおさいど」」

待ち合わせの場所に30分アリサを待つてる

ユーナは暇で持つてきたウォークマンで音楽を聞いている

何の曲か気になりながらもやたら男が集まっついて騒がしい一帯に目を向ける

「なんだあれ？ アイドルかなんかいんのか？」

「ん、那緒あれねー前に長い車に乗つてた金髪ちゃんがいたよ」

イヤホンを片耳だけ外しいつでも聞けるようにしていた

器用だな。それよりも長い車に金髪ちゃん、ユーナが知ってる人

……

「あつ！ ユーナ何でそれ早く言わなかった！」

「え、言った方が良かったの？ もーそれ言わなかったら言わないでしょ！」

「何で怒られた！？ それよりも行ってくるからここで待つてな」

了解と言つて外してる方のイヤホンを耳に付けた。それを確認して男の群れに駆け出した

？

「「ありささいど」」

最近隣になった男子、君野那緒がすごく気になる。もちろん好きとかの気になるとかではなく、授業中に寝たり、忘れ物をよくする

クラス学級委員の私にとって先生の授業を聞いて欲しかったし、君野のためにもならないし私のプライドが何よりも許されなかった

君野那緒は変人だ。今日体育の授業があった。前の時も今回も体操着を忘れたから貸せだって、羞恥よりも先に手が出てしまった

その後、授業を休んだ君野は木の陰で寝てるのがチラツと見えた

そして私にとってのあの日が起こった

体育の授業が終わりいつの間にかいなくなっていた君野が気になったもののお弁当があるから屋上で場所とりしなくちゃ。すずかとなのははトイレ行ってから来るらしいから尚更ね

急いでもと上級生の三年が廊下を封鎖しギャーギャー騒いでいる
面倒くさくなりそうだと思いわざわざ迂回しようとした

「ちょっと止まりなアリサ・バニングス」

急に呼び止められ肩を捕まれる

「はい何でしょうか？ 先輩方」

だいたいこういうのは分かってる

「面貸しな」

イライラと早く行きたい気持ちを抑え、来た道に戻っていく

？

定番と言えば定番の体育館の裏、私は乱れた服装と染めた髪の中3と思われる5人組の女子が笑いながら迫ってきた

「最近ちょーしにのり過ぎじゃない」

「どういう意味よ」

「そう言うのを言っただよ！ 敬語を使え！」

「何かと思ったらそんなこと。ふつ、笑っちゃうわ先輩方失礼だけど規則を守れないような方々には敬語なんかもったいないわ」

正直とても怖い。襲ってきたら、小さいときに習った護身術で何と

かなるけど

何しろ実践経験がない

「なあ、アネキこいつ足が笑ってるぜ」

「あーら本当。アリサちゃんも意外とびびりなんだね」

皮肉そうに笑った先輩方に負けないように食らいつく私

「何の言いがかりよ。冗談も程々にしなさいよねバカ」

本当はわかってる。恐怖からくる脚の震え

「調子に乗って！」

拳を握り私の顔めがけて殴ってきた。とっさに目をつぶってしまっ

もうだめだ！ 護身術なんか役に立たない

そう思っても一向に顔に来る痛みが来ない。恐る恐る目を開く
ボサボサした髪、私の少し高い身長

私はこの人を知ってる。でもどうして？ もう昼食の時間始まって
るのに

疑問でいっぱいの人に振り向いた

「何でこんなことになってんの」

眠たそうな顔と声、ちゃんとすればかつこいいのに後かわいい
…。全てがおかしい
でも今はすごく頼もしい

「そ、そんなこと君野には関係ないでしょ！」

「関係ないね…。じゃまた後で」

一人の先輩の拳を片手で受け止めた君野はそれを払いどっか行こうとした

「ちょっと待ちなさいよ君野！ どう考えてもその選択はあんまりじゃない？」

「いやゝ状況次第で手を貸そうかなと思ったなら教えてくんないんだもん」

どうにか説明をして納得した君野は困った顔してその後口元が弧を描いて小さく笑った

「ちょっと待ってなすぐ終わらせるよ」

ボサボサの髪を両手でほぐし元の髪型に戻し先輩の方に向く

大丈夫わよね…。もしも君野の身に何かあったら

胸の奥からギュウと湧き上がる気持ちになる

え、何この気持ちわけわからない
でもすごく安心できる

「先輩いくらなんでも定番過ぎません」

「誰だよあんた。関係ない奴は失せな！」

「あんたたちに関係なくてもこっちにはあんだよっ！」

いつもだるそうにしてる声とは裏腹に初めて聞く怒声

「最近の後輩は教育が悪いね。やっちゃうか」

後ろの4人は頷き今にも襲いかかってきそうだ

「一つ聞いて良いかい後輩くん」

「あぁんなんだよ」

「あんたには関係あるって聞いたけどそれはなんだい。後ろにいるアリサ・バニングスのためか」

「アリサ・バニングスなんて関係ねえよ。俺は全て自分のために行動する」

さつきとは反対に胸が締め付けられる。すごく苦しい

「それがアリサ・バニングスがいてもだ。なんと言っても俺のお気に入りの場所で騒いでたのが許せねえ！」

『えっ！？?』

この場にいる全員が言葉を失った

「ん？ まあ女でも手加減しないから」

「へっ、年下が生意気言ってんじゃねえよ」

その言葉と共に5人が君野に殴りかかる。後ろから見る君野はファインディングポーズをとっている

先頭にいる女Aがさつきと同じように拳を一線上に顔めがけて殴ろうとし、君野は難なくそれを避け女の腹に一発いれる

「やべっ、入っちゃった」

余裕そうに言っていたが次は後ろにいた2人がかかってきた

「くたばれガキ！」

「調子にのんなよ！」

最初にしゃべった女Bが殴りかかりもう1人の女Cが蹴りを繰り出した

それを紙一重に避け蹴りを腹に入れ後ろに突き飛ばす

突き飛ばされた女Bは蹴り出した女Cの足に当たりその場を倒れる。女Cは動揺しそれをチャンスと思い君野は倒れてる女Bを飛び越え跳び蹴りをする

「クソッ！ これでもくらえ」

女D、Eは足元にある石を君野に投げた

「君野危ない！」

とつさに出た声に反応し君野は私を庇うためにそれを避けなかった、避けれたはずなのにも関わらず

「大丈夫！？」

「あー平気。いってーなあ！」

猛ダツシュしそれぞれ腹に拳をたたき込み終わった

「よかった…キャ！」

突然後ろから何者かに掴まれ首元に冷たい物が伝わってきた。
尖ったナイフだ

「へっ、そのの後輩調子に乗るのもここまでだ
大切なアリサ・バニングスちゃんがどうなってもいいのかなギャハ
ハハハハ」

「離しなさいよバカー」

「うるさいよアリサ・バニングス」

「あーあ、そんなことしたら取り返しのつかないことになるよ。先輩
でも、安心！ 俺切れちゃったからね」

一歩ずつ歩いてくる君野はすごい威圧感を出している

「くんじゃないよ!」

女Aでも君野の威圧感に押されてる

助けて君野!

「了解お嬢様」

いつの間にか出ていた声に君野は冗談ばく声をかけてくれる。
それが恥ずかしくて顔が熱くなる

「あつ! 後ろに先生がつ」

「えっ!?!」

後ろを向く女Aと同時に君野は走り出し私を担いで走り出した

その後私は何事もなく帰ってく君野をお礼が出来なく次の授業で
ありがとつを言おうと決意しずかたちのいる屋上まで歩いていった

デート？ いえ、買い物しました。（後書き）

アリサが那緒を好きになるきっかけの過去でした。話の矛盾がないか不安

八つ橋はアリサが好きなようです
なにかとアリサが出てくるのはしょうがないでしょう

ヒロインの榎奈を出さなければ

タイトルとかはない！ 買い物の続きがありました。（前書き）

19話です

連続投稿！ 明日か明後日のリア充dayに特別としてイベント会
が書けると良いです。未定ですが精進します！

ユーナですが名前統一した方が分かりやすいですかね？

前よりもggggです。ワンパターンな展開でごめんなさいorn
ではどうぞ

タイトルとかはない！ 買い物が続きました。

？

「「ありささいど」」

「ねえ、君かわういいね。一緒に俺たちと楽しい遊びしない？」

「絶対君も楽しくなるよ」

何こいつらこっちがいらいらしてんのにチャライわね

周りにはチャライ関係者ではなくただの野次馬共が囲んでる

「待つてる人いるから遠慮するわ」

「そんなこと言わないでさあ遊ぼうよ」

「しつこい！ 待つてる人いるって言うてんでしょ！」

「こっちが下手に出てるからって調子に乗って！」

私の腕を掴んで引つ張る

「止めなさいよ！」

那緒助けて！ 前みたいに助けてよ！！

？

「（なおさいど）」

男共をかき分けやっとなに入れた

アリサどこかな？ もう待ちくたびれて帰ってるかなまあ、探さないで言うよりまずは探さないとな

「止めなさいよ！」

はいみなさんわかったかな？ はいそうです。アリサです

「たく何やってんだか」

アリサのもとに行ったらアリサの腕を掴んでる男がいた

「アリサ！ お待たせしました」

「那緒！ ほんつとうに遅いわよ。何してたのよ」

「ちよつと服選ぶのに手間取っちゃって」

「あんたは女か！」

「それ冗談で、それより早く行」

「ちよつと待てよ！」

アリサに絡んでいた男が肩を掴んできた

ちっ、帰してくれなかったか

「なんだよ」

「この女は俺が目付けたんだ。お前は引っ込んでろ」

「それが俺の女でもか」

嘘言っただけ良いよねこの際、早く買い物行きたいしさ
アリサが顔赤いけど気にしない

「ちっ、男連れかよ」

そそくさ男は帰って行った

「よし行くか」

「那緒、俺の女ってk「那緒ーウォークマンの充電無くなったー」
え？」

アリサの言葉を遮りいつの間にか男共が消えてユーナが走って
きた

「そうかまあよくね？」

「それもそうだねー金髪ちゃんだーやつぽー」

「ちょっと那緒！ この子誰よ。何でこんなところにいるのよ」

「ああ言ってなかったな。こいつは君野優菜、今日は3人で買い物しよう」

「聞いてないわよっ！」

言ったような言っていないような
とりあえずスルー

「仲良くやれよな」

「那緒無視！？」

「もういいじゃん。金髪ちゃん遊ばー！」

アリサは納得がいかないようだがユーナの性格ですぐに仲良くなりとりあえず買い物をするために歩く

？

ショッピングセンターに着きユーナは食べ物を買わされアリサは無駄に高い服を買ったり、俺は財布が軽くなるのを涙したり

そつえば今日のアリサいつもとちがうような…

服装はヒラヒラのスカートに薄い赤のフリルが付いた服。胸元にはハートが2つ付いたネックレス

髪型がいつもはおろしただけだが後ろを結びポニーテール風

学校で見てるよりも大人っぽく、胸元が開いていて色っぽい

アリサって本当に中学生だよなっ!?

「ん、どうしたのよ?」

ユーナと一緒にクレープを買い食べているアリサが視線に気づいた

「なんでもない!」

思わずそっぽをしてしまう。どうしたのと首を傾げるアリサ

不自然のないようにアリサの方に向き直る

あ、口元にクリーム付いてる。これってベタだけど狙ってないよね? でも家ではユーナとか母さんの食べている物とか上げたりもらったりしてるし大丈夫だよな

荷物を持ってない方の手でアリサに付いてるクリームを指先ですくい口に入れる

「意外とうまいな」

「な、な、何すんのよっ!」

「クリーム食べた、ただただ何か？」

「付いてるとか言ってくれても良いでしょ！」

顔を真っ赤にして怒ってるようなアリサ

やっぱり食べない方が良かったのか？ それとも味聞いているのか？

とりあえず味から言っとくか

「アリサのうまいな、ありがと」

「も〜、那緒のバカ！」

「那緒、優菜のも取って食べて〜」

ユーナの声でアリサの声が聞き取れず、わざわざ〇元にクリームを付け食べてとせがんだ

「わざわざつけんなよな。おっ、これもうまいな。あ〜俺も買えば良かった」

そろそろあれ買うか

後悔もほどにして例の計画実行に移す

「ユーナにアリサ、俺トイレ行ってくるわあ」

2人の了解も取りトイレとは反対方向に向かって走った

？

俺とユーナとアリサの初買い物記念にお揃いのキーホルダーを買った

そのキーホルダーは「NYA」

俺たちの頭文字をアルファベットにした物。アリサは赤で俺は青、

ユーナはオレンジ

少しだけ女の子っぽいと思ったけど平気だね…

自信は無いけども……

「そろそろ戻らないとな」

アリサたちと別れた、道に戻るため歩いていると粉雪みたいな白銀の腰まで伸びた艶やかな髪で白いワンピースの後ろ姿の女の子が不良に絡まれてた

まさかね… 本当にあるわけ無くもないけどまさかよりによって俺！？

いかんいかん、自意識過剰になりすぎてた

ここは得意のスルーを使って素通りしますか

てくてくといつもより速く歩き逃げようとする

それに気付いた女の子は俺よりも速くない走りで俺を掴んだ

「…たすけて」

「やっぱこうなるのか…」

あのランキング間違ってるないけど徹底的な所ミスってるよね！？
これって普通に厄介ごとだしランキング的には12位だと思うんだ
けどなあ

「おいそこのガキイ後ろに隠れてる女渡せよ」

ああ、前にもこんな事あったな。あん時はアリサだったな
確実に言えることがある

フルぼつここにされるううう！！

アリサの時だってかなりビビりながらやったからね！

一つ上だったけど女って言うアドバンテージがあつたじゃん。でも
ね、今回は違うんだよ！ 年上に見える複数の男で武器所持してん
スよ。なんでやねん！！

「俺に出来ることは…」

うん、やっぱあれしかないよね

女の子の手を掴み自分の出来る限りの力を脚に込めて地面をは
じき出す

「逃げる！」

「おら待てっ！」

出遅れた不良は先頭が転びドミノ倒しみたいに転んだ

よっしゃ！ 生きて帰れる～

だいぶ走り安心な場所で止まる。2人共息が若干切れ肩で呼吸をしていた

「…ありがてう。名前を教えて」

「いえいえ、逃げただけだし気にしないで。名前は那緒」

「那緒！？ いや違うか……」

一瞬驚いた顔をしすぐに落ち込んでしまった

同じ名前の知ってる人でもいたのか？

「ごめん。もう行くわ～気をつけて帰るんだぞ」

相手の相槌を見ないで走って行った

？

無事アリサたちと合流しその場で何するか決めている

「で、どうするの?」

「どこ行こっか…」

「那緒無計画なのね。そんなんじゃモテないわよ」

ふん、どうせ今までの年齢〓彼女出来ない歴ですよ

「あつ! 那緒もう家帰らなくちゃ!」

唐突にユーナが言い出した

「何だよ」

「ふっふん、それはなんと! みーちゃんと旅行行くからです」

両手を腰に当て偉そうに言うユーナ

「はあ〜〜!?!」

え、なんで? 息子である俺に何も言わないで勝手に決めちゃったの?

「じゃ、そゆこと。じゃね〜」

ユーナは手を振りながらそそくさと走り去ってしまった。アリサと俺は呆然とユーナの後ろ姿を見てるしかなかった

「行っちゃった…。どうする那緒?」

少しの心配と大半の同情とした表情で尋ねる

もういいや、ユーナのキーホルダーは帰ってから渡すとしてもうとことん遊んじまえ！

「よし、アリサ映画見に行こー」

「映画！？　これって本当のデートみたいじゃない」

アリサの言った言葉が聞こえなかったが時間が勿体ない。勿体ないオバケが出てしまう前に行こう

アリサの手をとり一番近い映画館に向かって走った

？

「〔ありささいど〕」

新しく友達になった女の子、君野優菜

名字の通り那緒の家族で私たちと同じ年ぐらい。黒い髪のストレートヘヤーに整った顔立ち、私でもまじまじ見てしまうほど可愛い。フェイト、なのは、すずか、はやて、榎奈とは全く違う性格をして新鮮だった

その子が那緒の親と旅行に行くとかで私にとって幸いで那緒だけが残り私と映画を見ている

那緒的には残念かもしれないけど、そんな些細なこと気にしないわ

私は今映画を見てるんだけど、やってるのが丁度面白そうなのがなかったからホラーを見ようとなった

そこでちょっとお互いに意地を張ったのが運の尽きだった

？

「「なおさいど」」

『ギヤヤヤヤヤー』

ヤバイヤバイヤバイ、なんでトイレからうじゃうじゃと黒いGが溢れてくるんだー

アリサもこれにはある意味の恐怖だよ

今映画では 旋律が駆け巡るG が上映されてる

この話は地球を侵略しに来たG軍隊が次々に国を侵略するホラ
ー映画

一つ言っておこう最初はGが何か分からなかったんだよ！そして偶然にもほかに面白そうなのが無くって

アリサが那緒はホラー映画なんて見れないわよね。怖すぎてなんて言うから男としてのプライドが許せなかったんだ！

元々ホラーは駄目だけどね…

巨大なGが次々と人を食べていき辺りは血の海と化した

「きもっ、Gきもっ！」

「言わないでよ那緒！ 考えないようにしてたんだから！！」

国の戦車が巨大なGに大砲を撃つ。砲弾の当たった部位から肉片が吹っ飛び、人の血では決してあり得ない緑色をした血が吹き出した

『ウギヤヤヤヤヤー』

もう無理、元々嫌いだったGがトラウマだよ

「うっ、気持ち悪い…」

「くっ、もう少しで終わるわ那緒」

アリサが頼もしい…

俺は手を椅子に付いている肘宛に置き何かに当たるが気にしないで握り締める

「な、那緒!？」

横でアリサが裏声で驚いたような声が聞こえた

「ん？ どうしたの」

「どうしたのって…顔真っ青じゃない!!」

あーこの握ってるのはアリサの手だったんだ…

「那緒!？ しっかりしなさい」

アリサの声が聞こえなくなり俺は気を失った

？

「ん…、ここは？」

頭からは柔らかい感触が伝わってくる

「やっと目が覚めたのね…。本当にビックリしたわよ」

上から安心した声が聞こえ、目線を上げるとアリサ顔があった

何があった？ 何でアリサの顔が逆さまになってるの？ この頭の
柔らかな感触は何？

もしかして！ そんなわけ無い！！

「いてっ」

「いたっ！ どうしたのよ！」

俺はアリサにあの伝説の膝枕をされているのでは？ と思い上
げてみるとまだアリサの顔がありお互いの額をぶつけた

「アアリサ、お前何やってんだよ」

「膝枕のこと？ しょうがないじゃない！ 那緒が急に気を失うん
だもん！！」

え？ Gごときで気を失っただと！ 男としてどうなの？ 製作者
もビックリだよ！？

どんだけ俺はチキンなんだよおおお！！

「あ、りがとうアリサ」

「どんなにキモイGで気絶するプッ、男でもププッ、気にしてない
わよ」

「すっごい笑ってるよね！ ああー最悪だあー」

ベンチから降りすたすた歩くとアリサが笑いながら付いて来る

「アハハ、気にしちゃダメ。私たちの2人だけの秘密よ」

ウインクをして口到人差し指を付ける

可愛い…。っていかんいかん！ これは買い物ついでだからその、デートなんてもんじゃない

「もう帰るぞアリサ！」

「わかったわよ」

そうだあれ渡さないとな

ポケットからアリサの分のキーホルダーを取り出し渡す

「上げるよ。今日の記念のお揃いキーホルダー」

「那緒…」

感動したように見つめられる

ちょっと恥ずかしいな。でもたまにはこっつうのもありかもな

「さっ、帰ろっアリサ」

「うん！　那緒って女の子見たいわよね」

今日の買い物はこれで終い。いろいろありすぎたけど楽しかったから良しとしよう

でも、女の子じゃないよ？

タイトルとかはない！ 買い物が続きました。（後書き）

分からない人のためにGについて

ゴキブリです。はい、こんだけです。すみません

次回はあったらイベントでその次は新キャラ回のほのぼのです

一日だけです。明日の正午まで、イベントで何かやりたいことを募集します

いただいた場合、すべては出せないですけど出来る限り出せればいいです

特別回 聖夜の夜のパーティーがありました。(前書き)

20話です

なんとか書けた・・・

クリスマスパーティーなのにクリスマスなんて要素が全然ない・・・
作者はこんな時でもハプニングを書いてしまうとは・・・
ハプニングなんて大好きだ！
ではどうぞ

注意事項：時間軸は関係ないです！ 那緒と大河は仲良くなっています
いつかはこうなると良いですね

特別回 聖夜の夜のパーティーがありました。

「ねえ、本当にやらなきゃいけないの？」

「そうやでアリサちゃん！」

「わかったわ！　じゃ行くわよ」

「ばっちこいやで」

「女子だらけの」

「男子禁制！」

『クリスマスパーティー！！』

ここは翠屋を貸し切りにしてクリスマスパーティーを開催していた

メンバーはなのは、アリサ、榎奈、すずか、フェイト、はやての六人組がいた

この小説の主人公こと那緒は優菜と一緒に買い物中な為不在。大河はミッドチルダで仕事のため不在

「最初っからぐたぐたなの」

「やっと始められたねなのは」

「これから何するの？」

この子たちの衣装はもちろんサンタとトナカイの衣装です

「早くケーキ食べない？」

とアリサが実はかなり食べたくてそわそわしてました

「あ、はいはい！ 翠屋特製ケーキ作ってもらったの」

手を上げぴょんぴょん跳ねるのはは実に可愛いですね

「さすがなのはちゃんや！ はよ食べようや」

「なのはちゃんのお店のケーキ美味しいよね。私も常連さんだよ」

と榎奈が言い、なのはありがとうと話をしていた

「なのはケーキここに置いてくね」

男子禁制の為、姉の美由紀がケーキを机の上に置いた

「ありがとう美由紀お姉ちゃん」

「いえいえ、じゃ楽しんでね」

美由紀は部屋に戻っていった

「みんな、お茶入れたからこっち来て」

「わかった、今行くねすずかちゃん」

すずか以外の子はてくてくとケーキの置いてある机に向かった

？

「あ、わたしはチーズケーキ」

「なんやて！？ それは聞き捨てならんでなのはちゃん！！ 私も食べたい」

なのはとはやてがチーズケーキの取り合いをしている内に各々が適当にケーキを食していた

「ずずずう、このケーキ美味しいわね」

ケーキを食べた後のお茶は特に最高である

「こっちのも美味しいよアリサちゃん」

とすずかが自分のフォークでアリサにアーンをしている

「はむ、わぁ本当だ。すずかも食べる？」

「うん、はむ。こっちもおいしいね」

いちゃいちゃしている2人はこのままにして後の2人を見てみよう

？

こちらは榎奈とフェイトがケーキを食べながらテレビを見ていた

「このテレビ面白いね」

「うん、ケーキも美味しいし呼んでくれてありがとう」

「もう、またそんな他人ごとみたいな言いぐさ止めた方がよいよ。友達でしょ榎奈」

「そうだね。はは、まだなんか馴れなくてごめんねフェイトちゃん」
と仲むつまじく話をしていた。案外仲が良い様子

？

「私がチーズケーキ食べるー」

「いいや！ 私やでこのために生きてるようなもんや」

言い争いがまだ続く中なのはケーキの箱に目線が行く

「だからなのはちゃん！ 私が食べるb「あゝ あゝ ああー」つてなんやなのはちゃん」

「わ、私のチーズケーキが無い」

「なんやってー！ 私のチーズケーキがあ」

2人はチーズケーキがどこに逝ったか見てみるとフェイトが食している

『私のチーズケーキイー』

？

アリサとすずかはケーキを食べ終え新たに豪華な料理を運んでいた

「美味しそうだねアリサちゃん」

「そうね。早く食べたいわ」

仲良く運んでるところにすごい勢いで走ってくる2人の姿があった

？

「美味しかったねフェイトちゃん」

「ちゃんとお礼に行かなきゃね」

ケーキも食べ終わり2人が座っていた椅子から立ち上がりキッチンに向かっていた

「にゃー！ そこいてアリサちゃん、すずかちゃん！」

「私のチーズケーキ！」

「えっ？ なのは！？」

「はやてちゃん止まってよ！」

フェイトと榎奈の前でアリサたちが盛大にぶつかりこっち側に倒れ込んだ

「えっ？ みんなっ！？」

「ぶつかるよ！？」

盛大に全員が転び盛っていた皿からこぼれ服にかかってしまった

「いったー、みんな大丈夫？」

「大丈夫じゃないわよ！」

「みんなごめんな」

「あゝ全員の服が汚れちゃったよ」

「着替えなきゃね」

「でもベトベトだよ」

上からなのは、アリサ、はやて、榎奈、フェイトが汚れた服を見ながら立ち上がった

「元の原因はフェイトちゃんが悪いんだよ」

「えっ！？ 私が悪いの？」

「そうやでフェイトちゃん私のチーズケーキを食べるから」

「はやてちゃん、チーズケーキは私のだって言ってるでしょ」

「いや違うつて」も〜う、うるさいっ！「すみません」

なのはとはやての争いに終止符をつけたアリサに2人は我に返り謝った

「みんなごめんね。みんなでお風呂入ろっか」

「そうだね。でも、みんなで入るのは」

「ちょっとね」

「私賛成やで！ はよ入ろっや」

みんなで汚れた服を洗濯機に入れお風呂に入りに行った

？

「ちょっと買いすぎじゃないかなユーナさん」

「買い過ぎちゃったね、那緒さん」

道を歩いているこの主人公とその家族が大きな荷物を両手いっぱい
に持っていた

「メリークリスマスと言う訳でおすそ分けしましょう」

「翠屋ですね。はい、と言うわけで着きました」

「さすがユーナご都合主義ですね。わかります」

若干テンションがおかしいがこれも聖夜の日の所為でしょう

「ユーナさんー大事なんです」

「なんだって」

なにやらお困りの様子、そんな中にある男の子が来ました

「何やってんだ2人共…」

「見てわからんかーユーナ！ やけに声が低い…」

「何言ってるの」。優菜何にも言っていないけど」

「いや俺だから那緒。で、何やってんだ」

「おお大河か前が見えなかった。気にすんな」

「そうだよ」。細かいこと気にする男はまちキモいからな」

「俺さあゝたまに君野家って何考えてるのか分からなくなる…」

「いやゝ照れるな」

「だね」。面と言われると乙女心があゝ」

「ぜんっぜん誉めるようなこと言ってるねえからな！」

「で、そんな事より大河は何しに来たんだ？」

「無視かよ…。もういいや慣れてるよ！ 俺は仕事の帰りに近くに寄ったから来ただけだ」

「仕事とか不良ですね」

「親の顔が見てみたいっ！」

「めんどくさっ、君野家かなりめんどくさっ！」

「そんな事言っなよ。友達だろ？」

「そのどや顔うざっ、その女も荷物持ちながらやれやれのポーズすんなよ」

「大河くんやドア開けてくれんかのう」

「わしたちゃーもう年でのう」

『困った困った』

「わーてるよ開ければいいんだろ！開ければっ！」

「む、大河くんやその手に持つてるものは何だね」

「那緒さんやあれ present と言うものですよ」

「present? 大河くんがかね？」

「だあーそうだよプレゼントの何が悪いんだー」

那緒と優菜はおやおやまあまあと大河を近所の奥様みたいに笑っている

「で、誰にあげるんだ？」

「わ、分かってんだろ！ は、早く行こうぜ」

照れながらドアを開ける大河を那緒たちは微笑ましく見ながら店に入っていた

看板の貸し切りという立て札があつたのを見てはいなかったが…

？

「あーお風呂気持ちよかつたー」

「ちょっとアリサちゃんいくら誰もいないからって裸は無いじゃない？」

「気持ちいいからええんちゃうかすずかちゃん？」

「とか言うすずかちゃんちゃんも裸だよね」

なんと花も恥じらう女の子が全員裸で翠屋でキャッキャしているではないか

ーガチャ

そこでドアが開く音がした

『えっ??』

「What's happen?」

誰が言ったか分からないが言わなくても那緒だと思いが優菜以外の
みんなが驚きに満ちた声を上げる
その後言わずとも次の流れは見に見えている

「きい…」

『きややややー!!』

この後は那緒と大河だけが殴られ何故か優菜までもが二人を殴って
いた

『なんで俺たちだけこんな目に遭うんだ…』

何だかんだで今宵の聖夜を存分に楽しんだのはたちだった

特別回 聖夜の夜のパーティーがありました。(後書き)

どうだったでしょうか？ この回を読んでいただいた方ぜひ感想を
お願いします！！

とか書いた連続投稿！

新しい家族が出来ました。(前書き)

21話です

遂に新キャラが出てきました！これからどんな展開になるのでしょうか！！

ではどうぞ！

新しい家族が出来ました。

アリスとの買い物を終え、気持ち的には久々に帰ってきたと思う家に着いた那緒です

ドアを開け自分の荷物を部屋に置きリビングに行く途中でシャワーの水の音が聞こえた

あれ？ ユーナと母さんは旅行に行ったはずだよな俺を置いてねっ！

疑問に思いながら洗面台と隣り合わせになっているシャワー室を抵抗もなく開ける

うんと、さっき白いワンピースがあつて玄関にも母さんたちの靴らしき物はなかったけど見知らぬ白い靴があつた

濡れた粉雪みたいな白銀の髪、健康的な白い肌。驚いた顔したのが可愛らしくまだ幼さが消えていない。特に印象的なのは一瞬見た背中に大きな傷跡

「だ、誰？」

「あなたが那緒…」

この女の子が俺の新しい家族であり、姉であり、妹でもある新しい出会いだつた

？

ふー、今の状況を確認しよう。もうこれ、定番だよな。人は誰でも嫌なことから目を背く傾向あるよね。特に俺とか裸の女の子がね抱きついてるんだよ…

チキンボーイの那緒くんはまともな判断がつかないわけでも、その際にまじまじと直視してしまったわけで、鼻血が出かけたときわかった？ ついでに鳴きながら那緒、那緒って言ってるんさ！言語統一出来てねえ！

黒いGよりも効くわっ！ 理性的な意味で

「そろそろどいてもらわないかな？ 風邪引いちゃうよ。聞きたいこともあるし」

ゆっくりと離れ裸体があらわになる

ギャー、見えたまた見えたよ。油断して下の方も見えてしまった嬉しいけども刺激が強すぎるう！！

「体拭いて…」

「What's up？」

何言ってんのかなこの子、俺を殺す気かな

「使用人がいないから体拭けない…」

「今までどんな生活してたし！」

「体洗うことしか教わってない…」

バスタオルを俺に渡し痛々しい背中を向ける

「くちゅん、早く拭いて…」

「ああーわかったよ」

なんで精神をGに削られた後に理性を削ろうとするんですか神様！

でもなんでこんな傷跡があるんだ？ 平和な世界にあるわけ無いよね？

ともかく風邪を引きそうだから拭かなきゃ。ここでやましいことを考えるな！ よし、いざ出陣！

恐る恐るタオルで肩を拭く

ーフニユ

全軍撤退い！ なんて強いんだ。柔らかくて、意識しないようにしても意識してしまう

くっ、まだMY SONは稼働してはない。さっさと拭いてしまおう

見ないように拭く。しかし感触だけは残ってしまったため、唇を
噛んで我慢する

「やっと終わった…」

「ありがと…。次は服着させて…」

な、なんだ、と…。今何て言ったのかな？ 本当は聞こえたけども
服を着させてですと…

「頑張つて着替えてくださいー！」

「あつ…」

驚いた顔をしていたが見向きもせずリビングに駆けた

？

「あゝあー、づがれたー」

ソファーにダイビングをして1日の疲れが出てきた ふと、

地面に落ちている紙が目についた

ん？ なんだこれ

紙を拾い上げ見えるように天井が隠れるように見る

何々内容わあゝ

今日から新ちゃんが帰ってくるから優菜ちゃんと一緒に旅行に行ってきます。新しい家族のイヴちゃんがどうしても残るって言ってから仲良くやってね

それと旅行は一週間ほどね。後はイヴちゃんのお世話の仕方を机の上に置いときます。では、楽しんでくるね

あれ…なんだこれ？ 旅行？ 新しい家族？ イヴ？ こんな大事なことでどうして紙で話すかな…

お世話の仕方って…

とりあえず起き上がり机にあるイヴちゃんのマニュアル本と書かれた薄い本を手にする

内容はこう書かれていた

パート1

まずはイヴちゃんについて説明しよう！

イヴちゃんは私の大好きな旦那さんの新一さんのしんちゃんが敷地内に迷い込んだ身元不明だったイヴちゃんを養子に引き取ったから

だよ

綺麗な白銀の髪に艶々した肌にとっても可愛い顔をしたのが特徴だよ！

パート2

いろいろなお世話の仕方

イヴちゃんは可愛いからイヴちゃんを狙っているオオカミさんから守ってあげてね

イヴちゃんはお風呂はしんちゃんの使用人に洗っててもらってたけど引越す過程で時間が少なくて体を洗うしか教えられなかったらしいから手伝ってあげてね

あっちに住んでいた頃はお箸を使う週間がなかったから食べさせてあげてね。ちゃんと箸の使い方覚えるまでだからね

部屋は無いからずっと狭いと思うけど同じ部屋でよろしくね。ちなみに私はしんちゃんとダブルベットだよ！ 那緒くんは弟と妹どっちが欲しいかな？ ウッフ冗談だよ！

だいたいこれで良いかな。学校はまだ手続きが終わってないから行けそうにないから早く帰ってあげてね

と書いてあったわけだが、かなりつつこみたいことが沢山だけ呼んでる間にイヴちゃんとやらが目の前にいるのがはつきり見える

まだ服を着てない状態で

もう勘弁して。ギャルゲーの主人公よりもハードなエンカウント率ですよ！ こういうの無理っすきついです

「どうして裸なのかな？」

「服がまだ届いて無い…」

だからってタオルぐらい巻きましようよ…

「待ってて今服持ってくるから」

「うん、わかった…」

またも見ないように視線を外し急いでユーナの服を持ってきた

？

「第1回新家族会議―初めてだけど気にしないで―を始めたいと思います」

「パチパチ」

いろいろ聞き出すために家族会議をする事にした。母さんが家族って言うなら家族なのだろう。この際気にしたら負けだね

「ではまず名前と年齢を教えてください」

知ってはいるけど一応念のために確認を取っておく

「君野・B・イヴ。年齢14才」

Bってなに？ フェイト・T・ハラOWNみたいなやつ？
でも
ビーって言ったけどそう言う名前か何かなの？

「間違えた…。君野・バレンタイン・イヴ」

あつ、バレンタインねー。まあ、とりあえず確認完了あと大事なことが二つある

「言えたらで良いけど、背中傷どうしたの？」

俺の言った言葉に悲しんだ顔をし考え始める

言わない方が良かったか…。家族でも言えないこともあるよな…。
それも今さっき初めてあった奴なんか話せる内容でもないし

「これは、私の国に魔法があったときの話」

「はっ？ 魔法…」

まさかの家族に魔法を俺たち以外に知ってるとは

「驚くのも無理無い…。私が王女だった6才の時オリヴィエと遊んで帰ったとき反逆者が国を崩壊して家族も親戚も騎士たちも殺され最後に残った私の命を狙った…」

怖かった…。逃げて逃げて、でも最後に追い詰められて背中を切られた…

もう死んじやうと思った…

その時周りが白く輝いて自称神様がお父様の住んでいたイギリスまで飛ばされた…」

語るにはあまりにも残酷で許し難かった。出会ったばかりだけど、守ってやりたいと思った

彼女にとって長く言葉を紡ぐ姿がすべてを語っているいろいろな感情が伝わってくる

神様が助けたってことは俺のことも話して良いんだよな…

「言ってくれてありがとう。次は俺の番な…」

「うん…」

俺は転生のこと、魔法を知ってること、ユーナはデバイスだってこと全てを話した

「そんなことが…」

後やらないといけないことがある

これからイヴの傷を直す！ 嫌な過去からもきれいさっぱり忘れさせる！！

俺の家族は笑顔でいなきゃ行けないんだ！

新しい家族が出来ました。（後書き）

感想などをどんどんお待ちしてます。
ぜひ何でも良いのでお願いします”

姉と妹が出来ました。(前書き)

22話です。

書く期間に間が空いてしまったためぐだぐだに磨きが掛ってしまっ
た・・・orz

感想など下さったらうれしいです！
ではどうぞ

姉と妹が出来ました。

こんにちわ那緒です

前回、初めて主人公みたいなこと言った俺が恥ずかしい
そっいえば神様から指輪の使い方聞いてなかったんだっ

「……」

「どうしたの…」

「え、と背中 of 傷治るとしたら嬉しい？」

「うん、綺麗なイヴをあなたに見せたいなあ…」

「治します！ 治させてください」

「えっ？ 治せるの…」

「もち……ろん」

あれ？ なんてこうなった？

使い方も分からないのに約束しちゃいましたよ！
許してください。あの嬉しそうな顔が可愛かったんです

とりあえず左手を天井に掲げる

イヴは自分の因縁が治ることにわくわくした顔で那緒を見る

神様っどうか見ていたらお願い聞いてください

しばらくの沈黙が流れ一向に変化が訪れない俺は黙っすに座る

ああ、ガツカリさせてしまったのだろうな

「気をしっかりしなきゃ駄目だよ」

「ごめんなさい」

「まったくこれだから君は駄目なんだよ」

「申し訳ありません神様…」

顔を上げるとイヴとその隣に座る神様の姿があった

「やあ、やっと気付いた？」

「つて、神様あああ!？」

「あ、自称神様だ…。久しぶり…」

「はい、久しぶりイヴちゃん」

何？ いつからいたんだよこの人お
まず人かどうか分からないけどもとりあえず一つ目の目的は達成したわけだし

何で言わなかったのか気になる…

「神様いつからいたの」

「君が左手を上げるところからかな。いやゝ恥ずかしいね」

「知ってる…。神様いるんなら言ってよ！」

「だって面白かったんだもん」

だろうと思ったもん。神様だし。何もかもフリーダムだよ

「で、君は何を叶えて欲しいのかな？」

明らかに分かっている顔だが敢えて聞く神様

「イヴの背中を治して欲しい。代償は何でも良いから」

「代償って何…」

心配したイヴが立ち上がって聞いてくる。イヴをなだめいすに座らせた

「等価交換ってのがあってそれそう等の代償を払うと願いを叶えてくれるんだよ」

「駄目…。治るのは嬉しいけど那緒がイヴのために背負うこと無い…」

「イヴ…」

手を取り合い互いの目を見合う

何ていい子なんだこの子わあ

「あの〜しんみり中悪いんだけど今回はチャラで良いよ」

神様は俺たちの気を遣わずに軽い口調で言う

今なんと言った？

イヴも頭に？ を浮かび首を傾げている

「だからね〜今回はチャラで良いよって言ったんだよ」

あ〜チャラね。思わずばいばいばいばいばい〜かと…
うん、長いし言いにくい

「でも、何で…」

俺がふざけている間にイヴは神様の顔を真剣に見ている

「ふむ、それは大したことでも無いんだけどね。那緒くんが左手の薬指に付けてる指輪の使い方を言い忘れちゃって〜」

イヴは左手の薬指と言う言葉に驚いて口をパクパクしている

何やってんの？

左手の薬指がどうかしたの？

えっ？ もしかしてここにはめたら効果が得られないとか…

まさかねどうせ婚約指輪は左手の薬指にはめるんだよ。…的なの？

そんなわけないよね。アハハハ、笑っちゃっわ。婚約指輪は右手の薬指でしょ？

簡単だよ。一般常識だよこれくらい

「ゴホンッ、だからね。イヴちゃんの背中チャラと言うわけでさっさと終わらせよう！」

おっと、今は婚約指輪は関係ないな

「そういうことね。じゃよろしく神様」

神様は了解～と言ってイヴの服を切り裂いた

「ちよつと待った！ それはおかしいでしょ！！ 何で服を切り裂くかな！？」

「だって見えないじゃん。それよりも治すよ」

神様は悪びれもなく言い、イヴの傷がある背中に手を添えた

なんで服切り裂くかな…

ユーナに怒られるじゃないか。神様でも女の子の服切り裂くとかダメでしょ

それよりも…

「なんで破られたのに平然にしてるの？！」

「神様に治してもらっし…。大丈夫かなって…」

「ぜんっぜん大丈夫じゃないからねいろいと！」

「うるさいよ那緒くん。集中出来ないじゃないか」

「ごめんなさい」

と言い、注意されたので着席する

あれ？ これ俺が悪いの？

イヴも大丈夫って言ってるし、気にしてるのって俺だけっ！？

でも、間違ってないよね。家族が目の前で服を切り裂かれたんだし……

ぶつぶつ考えてると神様の手から光が発し見る見るうちにイヴの背中が綺麗な肌になっていく

「…はい、完了っ」と

「神様…。本当にありがとう！」

イヴにしては大きな声で嬉しいことがわかる。そんな風景を見ているとこっちまで嬉しくなった

良かったなイヴ…

「ありがとう神様…。この恩は忘れないよ」

「いえいえ、それじゃ頼み事頼んで良いかな」

「俺が出来ることなら何でも」

「じゃはい、これを大河くんに渡してくれるかな」

神様は机の上に白神大河くんへと言う文字の封筒が置かれた

えええ〜〜

白神大河に渡すの〜

何なのか気になるけどさすがに白神大河でもそれはプライバシーの侵害になるし…

ここは素直に渡しとおくか

ハア、なんかやだな…

「まあまあそんなにやな顔しないでさ」

やな顔まるだったらしく神様は苦笑いし、イヴは話が分からないのか空気になっていた

「わかったよ神様…。白神大河に渡しますよ」

いやいや承諾し、話さないで渡すだけで良いかと思っていた

「じゃ、用事も済んだし帰るとしますか」

「そつかりがとう神様。でも泊まっていけば？」

「神様泊まれば…？」

感謝の意を込めて手によりをかけた料理をご馳走してあげよう

「神様が人の家に泊まるのってなんか可笑しいよね」。まだ仕事も

たくさんあるしまた今度にさせてもらっね」

む、残念…。また今度かあゝ
そんな機会あるかね？

「残念…。またね神様…」

「さよならイヴちゃん。那緒くん今度はクラシス持ってくるねゝ
あ、それと呼ぶ時はさっきの那緒くんのポーズでやってねゝ」

「マジですか！？ わかりました…。クラシス！？ ぜひお願いします！

神様イヴのこと本当にありがとう」

「ありがとう…」

俺の後に続いてイヴも言い、神様は俺たちを見て微笑んで眩い
光が神様の周りを照らしだんだん姿が見えなくなった

「良い家族になれそうだね。那緒くんこれからも上で楽しみに見て
いるよ」

あの神様にしては珍しく真面目な顔で優しい声で言った
その言葉が最後でリビングには俺とイヴしかいなくなった

行っちゃったか。また会えるはずなのにどうして一生の別れみたい
に悲しい気持ちになるんだろうか…

前のゲームをしたときだって同じ気持ちだったし

「くちゅん、那緒…寒い……」

くしゃみしたイヴを見てみるとまだ傷が治った綺麗な肌が目の前に映る

寒さを凌ぐために腕を組み胸は隠れ、座ってるため下の方は見えていない

あつれく神様服治してくれなかったのかな？ 神様は俺を出血多量で殺す気なのかな

まだそこはマシだけどあれだけはどうしようもない…
ユーナに怒ら…殺されるうっ！！

ユーナはファッションとか好きだし何より服を大事にしてるんだよな

最近一番シヨックだったのは同じ洗濯機の中に入れないでと言われた初めてね、てて親の気持ちわかったよ。てて親はまだまだ会ったことがないけど…

それよりもどうしようか…
遺書でも書くか？

いや、ここは正直に話すしか…これ却下だな
イヴのことも俺のことも神様のことも教えなきゃいけないしかなり話すのがめんどくさい…

思考の渦にはまっているとイヴの手から銀色の淡い光が発し服が見る見るうちに治ってしまった

「すこっ」

「那緒…服治した…」

「でかしたぞイヴ！」

これで死なずに済む！ 初めて魔法を見たかも、あつ、初めてではないか。

最初はユーナが初めてだった

今更だけどイヴって違和感あるよな…

ユーナはあんな性格だから妹っぽいけどイヴはユーナに比べて大人びてるからどっちかと言うとお姉ちゃんかな…

『あのさ…』

「あつ…」

被ったな。ああ、なんか急に気まずい

言葉がハモリとっさに2人共目を逸らして気まずさが漂ってしま
った

「先良いよ…」

少しの沈黙を破ったのはイヴの方だった

俺ってチキンだよな…

ここは普通俺から先に切り出すべきだよな
何でだろうね…

前世であまり女の子と接する機会が少なかったのが原因なのかそれ
とも俺が一人っ子だったせいなのか…

今も実際一人っ子だったけどユーナとイヴがいるから違うし

ダメだ…。俺のチキンとヘタレは治んねえかもな

自分のチキンとヘタレを半ば開き直っているとイヴどうしたの
という顔をしていたから慌てて会話した

「じゃ、あのさいヴ

イヴって呼び方違和感あるんだけど…」

イヴも同じだったのか頷き肯定した

「じゃ、那緒はイヴのお兄さん…」

「ちびっ子のお兄さんか」

「ちびっ子じゃない…!」

少し怒ったように言った

「ごめんごめん。俺的にはイヴがお姉さんになってもらいたい!」

困ったな…。ここは誕生日で決めるか!

「困った…」

「ここは誕生日で決めよう」

「わかった…」

「せーの」

『8月23日』

言った後しばらくの沈黙ができた

何この偶然、運命のいたずらなのかな？

それとも神様の所為かな？いろいろとごめんね神様何かと神様の所為にしてるね

「んつと、どうしよつか…」

「どうしよつ…」

考えた結果、もう何でもよくね？ となった

「じゃイヴは俺のことを兄として、俺はイヴのことを姉として呼ぶことはどう？」

半ば諦めつぱく思ってたがイヴは真剣に悩んでいた

「わかった…。な、那緒にい」

考えた後に照れた様子で言葉がはにかみながら言ったイヴはかなり可愛かった
可愛い…

でも、かなり恥ずかしいなこれ

イヴはちらちらとこっちを見て何かを待っていた

何してんのイヴわ？ もしかして、俺が何て言うか気になってる？

じゃ、言ってみるか

「イヴねえ……」

はずっ、名前なんかより数倍恥ずかしいんだけど！！

何度か呼び合っていたがもう眠くなる時間でいろいろ支度して寝ることになった

当然一緒の部屋で母さんが居ない間母さんの部屋で寝ればよかったと寂しいと言ったがため一緒に寝ることになった

姉と妹が出来ました。（後書き）

はやてのごとく！を溜まってたぶん買ったのだが新しい小説を考えてしまった・・・

まだ話は考えて無いんですが春にでも書きたいと思います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3162x/>

モブキャラに恋しました。

2012年1月7日01時55分発行